

上赤塙遺跡発掘調査報告書

— 繩文中期の集落址 —



1997

長野県上水内郡三水村教育委員会

上赤塙遺跡発掘調査報告書

—縄文中期の集落址—

1997

長野県上水内郡三水村教育委員会

序

村の埋蔵文化財に指定されておりました三水村上赤塩遺跡の発掘調査が実施され、ここに発掘調査報告書の発刊をみるに至りましたことは、誠に意義深く、関わられた皆様に感謝を申し上げます。

この発掘調査は北信に高速道路が整備されるのにともない、そのアクセス道路として県道三水・中野線が位置付けられ、拡幅改良区間に当遺跡があったことから発掘調査が行われたものです。

発掘にあたりましては、当村出身の小柳義男先生のご指導をいただき、二カ月にわたり多くの皆さんのご協力をいただき調査が終了いたしました。

この発掘から縄文時代の竪穴住居址群や多数の土器・石器、姫婦をかたどった土偶などが出土し、すでに集落が形成されていたことが明らかになりました。当時の気候は？　主食は？　生活に必要な水は？　寿命はどのくらいだったのか？　姫婦の土偶は何を願ってつくられたのか？　子孫は？…などなど、縄文人の生活や文化に限りないロマンと興味を私どもにいたしかせました。

青森県三内丸山遺跡は縄文遺跡として広く知られておるところですが、その報告には、「縄文時代はこれまで、原始時代のように扱われていたが、すでに高度な文化が築かれ、その生活スタイルは自由を謳歌し、現代人が失った心の豊かささえ感じられる生活様式であった」とあります。上赤塩縄文人の暮らしは、はたしてどうであったのか興味はつきないところであります。この報告書は、私たちの期待に応えてくれるものであると思います。

今、私たちは地球上に生きる生物の頂点に君臨し、地球上の有限の資源を使い、豊かさの中にありますが、「温故知新」——これまた大切なことであります。この書が新たな三水村と地域の発展につながることを願ってやみません。

終わりに、この調査にご協力くださいました関係者各位に敬意と感謝を申し上げ、発刊の言葉をいたします。

平成9年3月

三水村長 村松直幸

上赤塙遺跡発掘調査によせて

本村には、埋蔵文化財の遺跡が数多くあります。中でも、上赤塙の南方の丘陵周辺では、古くから縄文時代の土器類の出土が見られ、「上赤塙遺跡」として指定されております。

このたび、県道三水・中野線の拡幅改良工事にともない、指定地域内的一部が道路敷に含まれるために発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は1995年7月～8月の二ヶ月にわたり、戸隠小学校教諭小柳義男先生の指導に基づき行われました。

上赤塙遺跡からは縄文中期の竪穴住居址が道路拡幅の予定地から十三軒発掘されました。また、数多くの土器片や石斧、凹石、土偶なども発掘されました。

真夏の暑さの中で発掘調査にあたられた文化財調査員、教育委員、社会教育委員の皆さんや公募に応じ調査に協力くださった村民のご協力によって、予定区域内の調査が大きな成果を得て無事終了いたしました。

発掘によって出土いたしました遺物につきましては、整頓し保存収納して、生涯学習や歴史教育の資料として役立てていけるようにいたしたいと思います。

ご協力を賜わりました関係各位に敬意と感謝を申し上げる次第です。

平成9年3月

三水村教育委員会教育長 春日原盛太

例　　言

- 1 本書は、県道三水・中野線の改良工事にともなって実施された「上赤塙遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、三水村教育委員会が長野建設事務所の委託を受け実施したものである。発掘調査は平成7年度に実施し、整理作業は平成8年度まで行った。
- 3 発掘調査の記録および出土遺物は、三水村教育委員会が保管している。その際に用いる遺跡の略号は「SKA」である。
- 4 本書の作成にかかわる遺物の整理は、洗浄は作業協力者が、注記は小林紀子が行い、それ以後の整理は小柳義男が実施した。関係の図面類も小柳が作成したものである。
- 5 本書における実測図の縮尺は、遺構図1/60、遺物（土器、石器）1/4、拓本1/3を原則にしたが、一部縮尺の異なるものがある。なお、各実測図にその縮尺を示してある。
方位は磁北を使用している。
- 6 遺物の写真は、実物の大きさに比例するものではない。大きさは実測図を参考願いたい。
- 7 本書の執筆は、主として小柳が行ったが、第1章は小林秀雄が、第2章の第1節は永野稻雄が執筆した。編集は小柳が行った。
- 8 本調査にあたり、三上徹也、寺内隆夫の両氏にご教示・ご指導をいただいた。また、本書の作成にあたっては、中村由克、三上徹也、宮下健司、寺内隆夫の各氏にご教示をいただいた。徳永泰男、中島庄一、土屋積、石原州一の各氏および、中野市歴史民俗資料館、長野県埋蔵文化財センター、長野県立歴史館の皆さんには種々ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

本文目次

序

上赤塙遺跡発掘調査によせて

例　言

第1章 発掘調査の経過.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の体制.....	1
第2章 遺跡の概観.....	3
第1節 上赤塙地区の地理的・歴史的環境.....	3
1 地理的環境.....	3
2 歴史的環境.....	3
第2節 上赤塙遺跡をめぐって.....	4
第3章 上赤塙遺跡の調査.....	7
第1節 調査の結果.....	7
1 層序等.....	7
2 縄文時代の遺構と遺物.....	7
(1) 住居址.....	7
① S B 1	7
② S B 2	8
③ S B 3	8
④ S B 4	9
⑤ S B 5	10
⑥ S B 6	12
⑦ S B 8	13
⑧ S B 9	14
⑨ S B 10	14
⑩ S B 11	16
⑪ S B 12	17
⑫ S B 13	18

⑬ S B14	20
(2) 土 坑	21
① SK 1	21
② SK 2	21
③ SK 3	21
3 中世の遺構と遺物	22
(1) 土 坑	22
① SK 4	22
4 遺構外出土の遺物	23
(1) 縄文時代の土器	23
(2) 土製品	27
① 土 偶	27
ア 出土土偶	27
イ 土偶の製作技法	29
② 土製円板	29
(3) 縄文時代の石器	30
① 石 鐵	30
② 打製石斧	30
③ 磨製石斧	30
④ 石 盆	30
⑤ 磨石・凹石	31
⑥ 敲 石	31
⑦ その他	31
第4章 調査のまとめ	33

挿図目次

挿図 1 グリット配置図	7
挿図 2 SK 4 出土の刀子	22
第1図 上赤塙遺跡周辺図	35
第2図 上赤塙遺跡遺構全体図	36
第3図 上赤塙遺跡遺構実測図(1)	37
第4図 上赤塙遺跡遺構実測図(2)	38

第5図	上赤塙遺跡遺構実測図(3).....	39
第6図	上赤塙遺跡遺構実測図(4).....	40
第7図	上赤塙遺跡出土土器実測図.....	41
第8図	上赤塙遺跡出土石器実測図.....	42
第9図	上赤塙遺跡出土土器実測図.....	43
第10図	上赤塙遺跡出土土器実測図.....	44
第11図	上赤塙遺跡出土土器・土偶実測図.....	45
第12図	上赤塙遺跡出土土偶実測図.....	46
第13図	上赤塙遺跡出土土偶実測図.....	47
第14図	上赤塙遺跡出土土器拓本.....	48
第15図	上赤塙遺跡出土土器拓本.....	49
第16図	上赤塙遺跡出土土器拓本.....	50
第17図	上赤塙遺跡出土土器拓本.....	51
第18図	上赤塙遺跡出土土器拓本.....	52
第19図	上赤塙遺跡出土土器拓本.....	53
第20図	上赤塙遺跡出土土器拓本.....	54
第21図	上赤塙遺跡出土土器拓本.....	55
第22図	上赤塙遺跡出土石器実測図.....	56
第23図	上赤塙遺跡出土石器実測図.....	57
第24図	上赤塙遺跡出土石器実測図.....	58
第25図	上赤塙遺跡出土石器実測図.....	59
第26図	上赤塙遺跡出土石器実測図.....	60

写真図版目次

図版1	遺跡中央部 SB1・SB4 SB4埋甕炉	図版7	上赤塙遺跡出土遺物
図版2	SB2・SB3・SB4 SB5 SB10	図版8	上赤塙遺跡遺構外出土遺物
図版3	SB6 SB11 SB12	図版9	上赤塙遺跡出土土偶I
図版4	SB8 SB8地床炉 SB9	図版10	上赤塙遺跡出土土偶II
図版5	SK2・SK3・SK4 遺物出土状況	図版11	上赤塙遺跡出土土偶III
図版6	SB5出土遺物 SB13出土遺物	図版12	SB5出土石器と黒曜石剥片 打製石斧 剥片類 SK4出土刀子

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

県道・三水中野線の改良工事事業が平成11年度完成を目標に平成6年度から開始されている。

この事業にともない、上赤塙遺跡の調査を必要とするところとなった。

平成6年9月25日、試掘調査。

平成7年7月29日～8月19日 本調査を実施する。

第2節 調査の体制

調査委託者 長野建設事務所

調査受託者 三水村教育委員会

調査会

顧問 村松 直幸 三水村長

会長 帯刀 功光 教育委員長

理事 渋沢 武 教育委員

馬島 真一 教育委員

近藤武一郎 教育委員

調査団

团长 小柳 義男 戸隠小学校教諭（日本考古学協会会員）

調査員 池田 敦 文化財調査委員長

黒岩 吉衛 文化財調査委員

池澤 武利 文化財調査委員

三ツ井芳朗 文化財調査委員

調査協力者

赤羽 一喜 長野建設事務所長

渋沢 武勇 長野建設事務所建設課長

中沢 豊春 長野建設事務所工事第二係長

清水 将之 長野建設事務所工事第二技師

横瀬 好郎 三水村建設課長

原 芳春 三水村建設係長

作業協力者

岩下 久芳、滝沢 昌一、宮本 享宣、大川 荣吉、宮島三恵子
宮本 久子、峯山ちえ子、長崎 光悦、宮本 宏、永野 稲雄
若林 克子、久保喜代子、外山 異雄、島田 善美、宮島 俊嗣
宮本 義章、宮本ゆき子、荒井れい子、荒井 良水、三沢 貞利
岩下 茂子、大川 一躬、大川 徹、渡辺 宏、宮本 秀夫
野坂 衣雄、大川 壬一、池田美代子、松木 雄、滝沢 幸
小沼 敦子、松木 孝子、森 清子、長崎ミツ子、渋沢よね子
渡辺 志す、長崎 信子、小金井都子、君島翔太郎

事務局

春日原盛太 三水村教育委員会教育長
滝澤 初治 三水村公民館長
小出 一重 三水村公民館副館長
渋沢 清 三水村教育委員会次長
小林 秀雄 三水村教育委員会社会教育係長
野崎 鈴枝 三水村教育委員会社会教育主幹
小沼 祖道 三水村教育委員会社会教育指導員

(小林秀雄)

第2章 遺跡の概観

第1節 上赤塩地区の地理的・歴史的環境

1 地理的環境

上赤塩遺跡は、長野市の北約20kmの三水村東部の大字赤塩字西原と字境峰にまたがって位置する。三水村は、東北部は下水内郡豊田村、南は上水内郡豊野町、南西部は鳥居川を境にして同郡牟礼村に、西北部は同郡信濃町と、四町村に接する。

村内は斑尾山の南麓からびた丘陵によって、倉井・芋川・普光寺地区と、赤塩・東柏原地区の二つに分かれる。比較的起伏の少ない地域である。村の中央部には、斑尾山を源とする斑尾川が流れる。芋川地区を潤して南下した斑尾川は、倉井地区の南側で大きく北東に流れを変えて赤塩地区に入る。さらに豊田村に入り、千曲川に合流している。

また、南西部の牟礼村との村境を流れる鳥居川は、豊野町に入り、千曲川に合流している。

本村は、上水内郡の平坦部の豊野町から新潟県境の信濃町の間に位置し、海拔530m前後の準高地にあたる。年平均気温は10.1度ほどで（最高は8月23.5度、最低は1月-2.7度）、総雨量の平均は1,231mmになる^[1]。冬季の最深積雪は52cmほどである。

上赤塩遺跡は斑尾川に向かって張り出す西向きの舌状台地に位置する。台地の最高地点は530.9mで、530mの等高線が東西100m、南北130mの範囲を囲む。東・西および南方向はゆるく傾斜していくが、西から北は斑尾川が流れ、河床面まで（486m前後）いくぶん急な傾斜になっている。

丘陵東側山麓を越えると豊田村風呂屋遺跡や飯山市深沢遺跡も近い。南側もひと山越えると豊野町に出て善光寺平方面につながる。日本海も直線距離で40数kmで達するほど近くにある。

2 歴史的環境

赤塩地区には東柏原・天沢・上今田・毛見・上赤塩・瘤屋敷・論所・大西原の7遺跡が点在する。縄文時代中期と平安時代の遺跡が多い。

先土器時代（旧石器時代）の遺物は、出土地のはっきりしているものは大西原遺跡から出土している彫刻器だけである^[2]。

このほか、この時期の遺物と思われる石器もあるが、出土地が不明である。今後の調査で明らかになることを期待したい。

縄文時代では、いまのところ上今田遺跡から出土している前期（黒浜式土器）の資料がもっとも古いものである^[3]。また、上今田遺跡からは加曾利E式期の有孔鉗付土器の出土も報告されている^[4]。上赤塩遺跡は、これまで神田五六氏等によって調査されたほか、永野探集資料が寺内隆夫氏によって紹介されている。この概要については次節でふれられる。

東柏原遺跡から出土した土器は、すでに昭和28年に発行された『下高井』に中期の土器14点の拓本が紹介されている。昭和46年にも工事中にたくさんの土器が出土したようで、『三水村誌』にも紹介されている。勝板式や加曾利E式の土器が多いようである[5]。

天沢遺跡からは打製石斧が、毛見遺跡からは縄文後期の土器、打石斧、ペニス形土製品が出土している[6]。

縄文後期以降、しばらく遺跡の立地は確認されておらず、つぎに遺跡が見つかるのは平安時代になる。上赤塩・瘤屋敷・論所の三遺跡から土師器や須恵器が出土している[7]。

「赤塩」の地名が文書で確認されるのは鎌倉時代にさかのばる。嘉暦四年（1329）の源訪社上社「御射山左頭」のなかに「赤塩郷地頭等」の名がみえる[8]。

註

- 1 平均気温は『三水村誌』P111の昭和31年から51年までの21年間の記録から求めた。総雨量は『上水内郡自然編』P506、最高積雪は『三水村誌』P109の昭和33年から51年までの19年間の記録から求めた。『上水内郡自然編』（P526）によれば、信濃町野尻では平均158cmに達する。「一里一尺」の言葉が思い浮かぶ。
- 2 長野県史刊行会 1981『長野県史考古資料編全1巻(1)遺跡地名表』P59~60
永野稻雄 1975『上水内郡三水村大西原の男女倉型彫刻器』『長野県考古学会誌22』
- 3 長野県史刊行会 1981『長野県史考古資料編全1巻(1)遺跡地名表』P59~60
- 4 広瀬忠好 1975『長野県上水内郡三水村今田遺跡の有孔鈎付土器』『長野県考古学会誌21』
- 5 小野勝年 1953『下高井地方の石器時代』『下高井』P129~133 長野県教育委員会
三水村誌編纂委員会 1970『縄文時代』『三水村誌』P236
- 6 民野県史刊行会 1981『長野県史考古資料編全1巻(1)遺跡地名表』P59~60
- 7 長野県史刊行会 1981『長野県史考古資料編全1巻(1)遺跡地名表』P59~60
- 8 三水村誌編纂委員会 1970 「村々のはじまり 赤塩村」『三水村誌』P347

（永野稻雄）

第2節 上赤塩遺跡をめぐって

「上赤塩遺跡」の記録は、『信濃史料』第1巻（1956）に「（縄）打石斧」の出土が記されているのがもっとも古いものと思われる[1]。これより先、1953年に刊行された『下高井』には東柏原遺跡の遺物が多く紹介されているが、上赤塩遺跡の遺物はまったくみえない。

この後、遺物の出土が知られるようになったようで、1960年7月16~20日には、神田五六氏によって西原772番地の調査が行われている[2]。続いて1967年には北部高校によって調査されている[3]。神田氏は調査で出土した遺物を、公民館で地域の人たちに公開したようで、今回の発掘調査に参加された人の何人かは記憶されていた。しかし、残念なことに二度にわたる調査も報告書が刊行されておらず、内容を知ることができない。

1970年小林学氏は『長野』に「上水内郡三水村上赤塩遺跡」を紹介された。遺跡の景観を「常々

あの八ヶ岳山麓のミニチュアだと考えている」と述べられ、永野五六氏の採集された遺物について「赤塙遺跡にて採集される遺物はその大部分が中期縄文文化時代に属するものである。そして遺物のもつバラエティーも実に豊富で土器はもちろん、土偶・石棒・石皿・磨石・凹石と中期縄文文化人の日常生活に欠くことのできぬと從来考えられてきた生活用具・特殊な製品はひととおりそなわっている」と紹介されている^[4]。

1976年小林孚氏は『上水内都誌』の中でも「三水・赤塙」出土の土器17点を写真紹介している^[5]。後に「斜行沈線文土器」と称されるようになる一群の土器が多く見られた。これが、寺内隆夫氏の関心をよび、永野資料の詳細な紹介につながることになる。

1979年には、大久保邦彦氏が上赤塙遺跡出土の縄文中期中葉の深鉢形土器を紹介している^[6]。このようにして、上赤塙遺跡は知られるようになってきたが、その全体像は明らかにされることがなかった。

しかし、先に述べたように、「斜行沈線文土器」の位置付けを追求していた寺内隆夫氏によって1991年永野資料のうち「縄文中期前葉から中葉の土器に絞って報告」が行われ、上赤塙遺跡の土器群が詳細に分析され、その特徴が明らかにされた^[7]。

それによると、上赤塙遺跡の土器群の特徴を大きくとらえると、「中期前葉では五領ヶ台II式に平行する段階から資料の増加が認められ」、「広い地域の土器の特徴を取り入れて在地化させており、排他性は少ない」こと。さらに、「中期中葉に入ても、土器の出土量は衰えず、聚落が安定した状態で継続されていたことが予想」されること。土器の様相からは、「他地域との交通を保ちながらも、北陸系と中部高地系の網引きの中から在地性を強めていくように見受けられる」点を指摘された。

それぞれの時期の土器の特徴として、中期前葉では、①千曲川・犀川地域の土器、②在地性の強い土器（「深沢タイプ」と俗称される土器など）、③もっとも強い影響を受けたものの一つとしての北陸系の土器、④関東地方の影響を受けた土器、⑤分水嶺から南側の中部高地～西関東にかけての土器（影響はわずか）を指摘された。

中期中葉初頭（上赤塙4期）では、①分水嶺以南の影響が強まってくる。もっとも顕著には、斜行沈線文土器に見られる横位梢円区画文の採用。②その他の基本となる装飾要素は、依然北陸系の土器と共に通するものが多い。上赤塙5期以降では、①区画文をはじめとする器面の分割、区画化の影響がなくなり、横方向に流れる渦巻文が主装飾となっていく（分水嶺以南の区画重視の土器に対する差異の強調）。②上山田、天神山式や火炎型土器といった日本海側の土器と共に理念に支えられている。③小地域（上赤塙遺跡周辺地域）の独自性（上赤塙III群5類一焼町土器に平行する土器）の見られることを指摘された。

註

- 1 大正9（1920）年の『上水内郡史料展覧會出陳品目録』に三水村から出土したと思われる土器・石器類も記録されている。このうち「大川宣義 土器・雷斧」と記されているものは、赤塙地区の遺跡出土の可能性が高いが、現在所在が不明である。
- 2 長野県教育委員会 1971「長野県埋蔵文化財発掘調査要覧(1)」
- 3 長野県考古学会 1981「長野県埋蔵文化財白書」P318
- 4 小林 学 1970「遺跡探訪(4)上水内郡三水村赤塙遺跡」「長野」第29号 P99
- 5 小林 学 1976「縄文中期」「上水内郡誌」P72
- 6 大久保邦彦 1979「三水村上赤塙遺跡出土縄文中期中葉の深鉢形土器」
『研究ノート 3 地域研究の方向』
- 7 寺内隆夫 1991「長野県上水内郡三水村・上赤塙遺跡出土の縄文中期土器について」
『長野県考古学会誌61・62』P1~25

（小柳義男）

第3章 上赤塙遺跡の調査

第1節 調査の結果

1 層序等

遺跡は、斑尾川に向かってはり出す西向きの舌状台地に位置する。台地の中央部は腐食土の堆積が少なく、耕作土(15~20cm)下はわずか数センチで黄褐色粘質土(いわゆるローム層)に達してしまう。このため遺構も耕作の影響を受けている。台地は中央部に東西100m、南北130mほどの平坦面をもち、しだいに傾斜をしていく。この傾斜にしたがって堆積土も厚くなっていく(70~80cm)。この部分の層序はI耕作土(15cm)、II黒色土(20cm)、III黒茶褐色土(30cm)、IV黒褐色土(5cm)、V黄褐色粘質土となる。

調査地区は、カーブしている道路沿いに細長く続くため、グリットもそれにあわせて設定した。道路の北側に基準となるCラインを設定し(結果的に磁北に対して64°東に振れている)、これにあわせてDラインを計測した。道路北側はCラインに対し、5°北に(磁北に対して59°東に)振って設定している。

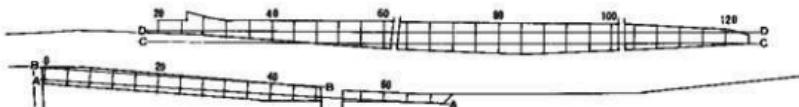


図1 グリット配置図

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居址

① SB1(第3図、図版1-2)

SB1はSB4を壊して構築されている。すぐ西隣にSB2が検出されている。SB2とも前後関係があるものと思われるが、道路がつくられた際に破壊されていて遺構からは前後関係がつかめない。しかし、出土遺物を検討するとSB2のほうが古くなりそうである。

住居址は南の端がわずかに検出できただけで、全体の規模は不明である。SB1の床面にもなるV層中に、III層の落ち込みとして見つかっている。SB1からSB4の西側までは表土から黄褐色粘質土まで25cmたらずしかなく、耕作の影響を受けて住居の様子がつかみにくくなっている。

このためSB1の壁は6cmほどの立ち上がりがつかめただけである。床面は平らでよくしまっているが、柱穴等は検出できなかった。

出土遺物（第14図1～7）

74点の土器片が出土している。第14図1は半裁竹管状工具による半隆起線が口縁部をめぐる。一番下の半隆起線は「U」状に下がる。この脇には沈線がめぐる。下部には縱方向の沈線がみえるが、器面があれていて構成が不明である。胎土に雲母を含む。2は口縁部の縁にヘラ状工具による刺穴がめぐる。中ほどに波状の沈線が横にめぐる。波状沈線の上部は右下がり、下部は左下がりの沈線が施される。胎土の白い粒がめだつ。3は半隆起線によりB字状文が施される。間を右下がりの半隆起線文と、それと交差する左下がりの沈線でうめる。みかけが格子状になるこの手法は、必ず右下がりの半隆起線を施した後に交差する左下がりの沈線を引くのが手順になっていている。胎土に雲母を含む。4は撚糸を施した後、棒状工具で沈線を施している。5は地文に撚糸を施す。その後、半隆起線で縦にB字状文を施文している。沈線による施文も重複する。胎土に雲母を含む。6の口縁部は大きく屈曲して立ち上がる。縄文が施される。7は隆起線によって器面が飾られる。胎土に白い粒を多く含む。持った感じがとても軽い特徴的な土器である。同様な破片が10点ほどある。この土器は中期前葉（焼町土器）に位置づけられるものだろう。

② S B 2（第3図、図版2-4）

S B 2はS B 4を壊して構築されている。東隣にS B 1、南にS B 3が検出されている。住居址は南側が弧状に検出できたが、全体の規模はつかめない。それでもおよそ7mほどになる大型の住居の一部ではないかと思われる。V層の中にⅢ層の落ち込みとして見つかっている。

床面は、全体に西側に傾斜している。壁は、もっとも高い東側で24cmほどある。柱穴は二ヵ所検出されている。P₂は径33cm、深さ45cmとしっかりしているが、P₃は深さが7cmほどしかない。P₁はもっとも広いところで長さ80cm、深さは6～15cmの不整形なビットである。東わきに石皿が伏せた状態で見つかっている。

出土遺物（第7図1・第14図8～12・第22図1）

土器片が68点、石器が2点出土している。第14図8は地文に縄文がみえる。半隆起線が横方向に施される。地文との境には棒状工具による刺穴が施される。胎土には雲母が多く含まれる。9は地文に縄文を施される。二本の横方向の沈線の間を、格子状に右下がり、左下がりの沈線がともに棒状工具によって施される。胎土に雲母が多く含まれる。10・11は地文に縄文を施し半隆起線を垂下させる。10の半隆起線脇には沈線がめぐるが、11にはみられない。12は地文に縄文を施し、口縁部が段になる。第7図1は12と似た土器だが、口縁の内側に段がみえる。

これらの土器は中期前葉（五領ヶ台II式期）に位置づけられるものだろう。

石器は黒曜石片と石皿（第22図1）が1点出土している。板状に薄い石皿で安山岩製である。もろくて、手でふれると細かな石粒がぽろぼろ落ちてくる。長さ35.3cm、最大幅15.1cm、重量は2,005gある。圓化した面の中央部が浅く凹む。裏面にも一部に擦痕がみえる。

③ S B 3（第3図、図版2-4）

S B 3はS B 4の西側を壊して構築している。S B 4との床面の差は6cmほどしかない。住居

址の北側および西側は耕作の影響をうけているため、はっきり確認できなかった。南側は用地外に広がっている。やはり、V層表面でIII層の落ち込みとして見つかっている。

床面はA40付近まで、平らでよくしまっている。壁は、もっとも高いところで6.5cmほどしか残っていない。

P₁は直径60~77cm、深さ25cmほどある。多くの炭化物が出土し、炉かとも思ったが、内部が焼けていないことや位置を考慮し柱穴と考えた。第22図2の砾石が柱穴のすぐ脇から出土している。

出土遺物（第7図2、第14図13~18、第11図2、第23図2）

土器片が69点、土偶が1点、石器は砾石1点と剥片が2点出土している。

第14図13は口縁部に交互刺穴文が施される。その上の口縁端部と下の横方向に伸びた半隆起線上には竹管状工具による爪形文（C字状）が連続する。14の隆起線の脇には沈線が施される。押引されたような沈線によって波状文も構成される。上端部にも斜行する沈線がみえている。胎土に白い粒が含まれる。15は口唇部が特徴的である。竹管状工具によってなでられ、半隆起線状に整形されている。弧状の沈線が二本引かれているが、棒状の工具で一本ずつ引かれたものである。

16・17は無文部に隆起線が垂下する。18は隆起線や半隆起線が施文される。半隆起線の脇に幅広の刺穴が連続する。

第7図2は第14図15と同様な口唇部を持つ。器面全体に網文が施される。

これらの土器は中期中葉（貉沢式期）に位置づけることができるだろう。

このほか、土偶の頭部が1点出土している（第11図2）。住居内の遺物を洗浄中に確認したもので、出土状況は不明である。三角錐形を反対にした形に近い頭部で、頭頂部はほぼ平らで首は絞られて細くなっている。首の部分の末端は、ほど穴に刺し込むように先をまるめている。左右の耳にあたる位置と後頭部の計三ヵ所に穿孔があり、側面につき抜けている。顔は中央上部がふくらみを持って張り出しており、鼻筋を表現しているようである。目と口はいくぶん太目の棒状のもので刺して表現している。頭部からの穿孔のうち、二孔は左右の耳の位置に抜けており、耳を表現しているものと思われる。現在長3.7cm。

砾石（第23図2）はP₁のすぐ脇で出土したものである。砂岩の川原石を利用しておらず、重量は2kgほどある。一方の端が欠けているものの長さは29.9cm、最大幅は10.6cmある。擦痕は圓化した面にみえるだけであり、その範囲も長さ8cm、幅5cmほどに限られる。

④ S B 4（第3図、図版1-2・3）

S B 4はS B 1、S B 2、S B 3によって壊されている。東側の一部を残し壊されているため全体の規模を知ることができないが、大きめの住居址であったようである。南側は用地外に広がっている。V層表面でIII層の落ち込みとして見つかっている。

床面は平らでよくしまっている。壁はもっとも高いところで12cmほど残っていた。中央東寄りには埋甕が検出された（図版1-3）。がは45~50cmと大きく、炭化物も多く検出された。底の部分に径28cmほどの縄文を持つ土器の胴部が埋められていた。胴部の上部と底部付近は欠けている。

柱穴は二カ所検出されている。P₁は径22cm、深さ50cmほどあるしっかりとした柱穴である。P₂は径25cm、深さ31cmある。東壁に接するように、床面上に砥石が1点出土している。

出土遺物（第9図24、第14図19・20、第23図1）

土器片が10点、石器が6点出土している。

第9図24は埋甕炉として使われていた土器である。地文に縄文が施されている。現存部の最大径は28cmほどである。第14図19は半隆起線が文様の中心になる。20は地文に縄文が施される。竹管状工具によって施された「U○U」の模様が縦に連続する。第21図3・4と似た文様構成である。

石器は大型の砥石1点（第23図1）と磨石1点、剝片4点が出土している。砥石は砂岩の河原石を素材としており、2kgほどの重量がある。住居址東隅の床面上で出土している。長さ22.3cm、幅11.1cmある。圓化した二面に擦痕がみられる。とくに裏面はよく使用されたようで擦面がカーブをえがいている。

⑤ S B 5（第3図、図版2-5）

S B 5はS B 3の東側に検出されている。南側は用地外のため検出できなかつたが、ほぼ円形になるプランを検出できた。径3.1mほどの小型の住居であったようである。西に1mほどでS B 10が検出されている。IV層中にIII層の落ち込みとして検出できた。住居内に堆積した埋土の上部から黒曜石の小破片が集中して発見された。石鎚の破片が散点含まれており、その製作時にともなう破片ではないかと考えている。

床面はいくらか西に傾斜している。壁は、もっとも高いところで20cmほど残っていた。床面のほぼ中央には（第7図5）の土器が検出されている。床面を16cmほど掘りくぼめて置かれている。炉の位置にふさわしいところだが、埋甕炉にしては床面上に突出しており、不自然でもある。土器内に焼土がたまっている様子はなかつた。

柱穴は三カ所検出されている。最も東に位置するP₁は径25cm、深さ60cmほどもあるしっかりとした柱穴である。P₂は径35cm、深さ34cmある。P₃は径33cm、深さは18cmほどしかない。

出土遺物（第7図3～8、第14図21～31、第15図1～13、第24図2～15）

出土遺物は土器片650点余、石器48点と多い。

第7図3はキャリバー状の深鉢形になる。地文に縄文が施される。口縁部には隆帯を貼付して横円区画をつくる。区内は半截竹管状工具による半隆起線がめぐる。内側の空間には三角の切り込みや棒状工具による丸い刺穴（円文）が施される。胴部には半隆起線の波状文や直線が下がる。くびれ部には半隆起線が横に施されている。胎土に雲母を含む。

4は地文が無文の土器である。口縁部には横方向に三段の幅広で深い刺穴がヘラ状工具によって施される。その後、この刺穴の間を分けるように横方向の浅い沈線が施される。胴部には継に下がる波状沈線が連続する。胎土に雲母を含む。

5（図版6-19）は住居址の床面に据えられていた。（同様な例はS B 12でもあった）垂下する隆帯や、半截竹管状工具による半隆起線文が器面全体に施される。横方向の半隆起線上には刺穴

が施されている。また縦の半隆起線に開まれた空間を斜めの沈線でうめる部分もみられる。垂下する半隆起線にはさまれた部分は繩文が施される。胎土には白い粒が多く含まれる。

6～8は北陸系の浅鉢である。6は口唇部が竹管状工具によってなでられる。このため口唇部に沈線が引かれたようにみえる。無文で内外面ともていねいになでられている。胎土には白い粒や石粒が多く含まれる。7・8は地文に繩文が施される。7は四本の半隆起線が横方向に施される。最上部の半隆起線上にC字状の爪形文が連続して施される。胎土には白い粒や石粒が含まれる。8の口縁部には三角状の突起や上から見てS字状になる突起がつく。口縁下には3～4本の沈線がめぐる。沈線上には刺穴が施される。胎土に白い粒や石粒が含まれる。

第14図21は浅鉢形になるようだ。口縁部下のくびれと半截竹管状工具によって区切られた空間を、棒状工具を用いた縦の沈線でうめる。沈線は左から右の方向に1本ずつ引かれているのが確認できる。縦の沈線が施された後で、その上下にも横方向の沈線を施す。胎土には雲母が含まれる。22は上下を半截竹管状工具で区切り、その内側を縦に沈線でうめる。半隆起線と接する部分には、さらに刺穴が施される。胎土には白い粒が含まれる。23は半隆起線によって楕円区画がつくられる。半隆起線の脇には沈線が施される。さらに、区画に外側に引かれた沈線上には刺穴が施されている。区画の内部は波状沈線（左）と横方向の沈線上に刺穴を施した文様（右）によって構成される。口縁部は内傾する。小破片で明瞭でないが、波状口縁になる可能性もある。24は波状口縁の突起が台形状になる。途中から垂下した半隆起線にはさまれた空間は、横方向の三段の刺穴によって満たされる。半隆起線の外側の脇には沈線が施されている。胎土には白い粒と雲母が含まれる。25は浅鉢形の土器になる。横方向の沈線上に刺穴が施される。26・27は口縁部に波状の小突起を持つ。ともに地文は無文である。26は口縁部に小突起が連続する。すぐ下には半截竹管状工具による半隆起線がめぐる。胴部には指頭圧痕文が施されている。27も口縁部に小突起が連続するが、細い粘七ひもを貼りつけてつくられている。小突起の下は棒状の工具でなぞられている。内面も同じなぞりがみられる。下部には半截竹管状の工具による半隆起線が施される。28は波状口縁になる。地文は無文で横方向の半隆起線が施される。胴部に貼付された楕円形の塊の上には棒状工具による沈線が横に施される。胎土に雲母や白い粒が含まれる。

29～31は地文に繩文を持つ。29の口縁部は折り返し口縁状に厚くなる。胴部は結節繩文が施される。30の口縁部も折り返し口縁状に厚いが、外に広がり端の断面は三角状を呈する。繩文は口縁部にみられるだけで、胴部は無文のようである。胴部には棒状工具による沈線が施されている。31は繩文が羽状に施される。ともに胎土に白い粒を含み、30・31は雲母も含まれる。

第15図1～3は半隆起線による楕円区画文を持つ。区画内は波状沈線や刺穴によってうめられる。隆帯脇には沈線が施される。2の胴部には横方向の沈線状に刺穴が施されている。

4は半隆起線によって四角に区画された内部を細い沈線で、縦、横の順にうめる。縦に垂下する隆帯の外側の脇には刺穴が施されている。

5・6は竹管状工具によって右下がり沈線（半隆起線）を施した後、ヘラ状の先のするどい工

具によって左下がりの沈線が一本ずつ引かれる。

7は口縁部が折り返し口縁状に厚くなる。無文で胴部には指頭圧痕文が施されている。

8の口縁端部は内傾する。地文は無文である。上部に半裁竹管状工具による沈線（半隆起線）と波状文が施される。7・8の胎土には雲母が含まれる。

9は三角状の口縁になる。端は広がり厚くなる。厚くなつた口縁の下には刺穴が施される。

10・11は半裁竹管状の工具による半隆起線が横方向や、縦の曲線を描く形で施される。

12の口縁は円文が貫通する。地文に繩文が施され、その上に半円を描く沈線がみえる。内面には隆帯が半円状に貼りかさねられる。胎土に雲母が含まれる。13は胴部に環状の隆帯が貼付される。中心は先の丸いものでくぼめている。胎土に白い粒を含む。

これらの土器は中期前葉（五領ヶ台式期）に位置づけることができるだろう。

石器は石鏃6点、打製石斧5点、門石2点、磨石2点、敲石1点と剝片32点（2点は石器の素材か）が出土している（第24図）。

石鏃（2～7）は、未製品あるいは製作途上の破損品と思われる。このほか石鏃をつくる際の剝片と思われる黒曜石片も多数出土している。これらは1点2gほどの剝片が10点と、きわめて微小な剝片110gからなっている（この小剝片は10g中に200点ほどの小剝片を数えることができる）。

打製石斧（8～11）はすべて頁岩製で、破損したものが多い。

凹石（12・13）は2点とも安山岩の河原石を利用している。12は圓化した両面にくぼみがある。重量は196g。13も両面にくぼみがある。裏面は擦って平らにした面にくぼみ残る。重量は550g。

磨石は2点出土している。14は安山岩製である。全形を知ることができないが、石けん状に加工されているものと思われる。敲石（15）は砂岩の河原石を利用している。図の下半分に剥離やつぶれが集中している。重量は28gで、遺跡から出土した敲石の中でも小型のものである。

このほか頁岩などの剝片が30点ほど（575g）と、剥離痕をもつ石英粗面岩2点（2点とも1,400g前後で、接合する）が出土している。

⑥ S B 6（第6図、図版3～7）

調査区の西端で確認した。東に位置するS B 10からのS B 6までの間は、遺物は多く検出されたがSK 4以外の遺構は検出できなかった。

S B 6は南側は不明瞭であるが、ほぼ円形のプランになる。径2.8mほどの小型の住居であったようである。IV層中にIII層の落ち込みとして検出できた。

床面はほぼ平らである。壁は、もっとも高いところで26cmほど残っていた。

柱穴は四カ所検出されているが、炉に相当するものは見つかなかった。もっとも東に位置するP₁は径12cm、深さ34cmほどある柱穴である。P₂は径15cm、深さ35cmである。P₃は径23cm、深さは28cm。P₄は径15cm、深さ27cmである。四本とも細い柱穴であるが、意外と深くしっかりとしている。

出土遺物（第15図14～19）

土器片が40点出土している。14は内傾する波状口縁である。波状の先端部分は隆帯が縦に貼付されている。器面は縦の細い沈線でうめられる。下部に横方向の細い沈線が一本みえる。15の口縁部は肥厚し先端の断面は三角状を呈す。口縁部は細い沈線でうめられる。その下に二本の沈線が施され、沈線状には刺穴が間隔をおいて施され交互刺穴文状になっている。16は口縁部をヘラ状工具によって施された縦の沈線（半隆起線）でうめられる。その後、半截竹管状工具によって横方向に沈線（半隆起線）を施す。15・16の胎土には白い粒が含まれる。17は縦方向と波状の沈線（半隆起線）が施される。18は垂下する隆帯と横方向の波状沈線がみえる。17・18の胎土には雲母が含まれる。19は隆帯脇に沈線が施される。棒状の工具で斜行する沈線が施された後、同じ工具で上下に沈線を引いて区画される。下の沈線は左から右方向に押し引き状になっている。

これらの土器は（18は古めだが）中期中葉に位置づけられそうである。

このほか、土製円板が1点（第18図8）出土している。

⑦ S B 8（第4図、図版4～10）

調査区の東端で検出された。西に7mほど離れてS B 9を検出している。西壁の一部が確認できただけであったが、いくつかの柱穴に囲まれた内部の空間に地床炉を検出できた。東端は電柱があったり、調査区外におよぶため全体の大きさを確定できないが、径7m近くの大型の住居になりそうである。

V層中にIII層の落ち込みとして検出できた。

床面はほぼ平らであるが、東側にいくらか傾斜している。壁は、もっとも高いところで11cmほど残っていた。地床炉は径40cm、深さは13cmあり、赤くよく焼けている（図版4～11）。

柱穴は13ヶ所検出されているが、接近しているものも多く、建て替えなどによる重なりが考えられる。P₁は径23cm、深さ42cmある柱穴である。P₂は径22cm、深さ33cmある。P₃は径15cm、深さは14cm。P₄は径20cm、深さ30cmである。P₅は道路の路肩にあたる斜面に検出されたもので、もとの大きさは不明であるが、検出面で径25cm、深さ50cmほどある。もとは深さ60cmはあったものと思われる。P₆は径20cm、深さ14cmほどある。P₇は径25cm、深さ12cmほどある。P₈は径14cm、深さ20cmほどある。P₉は径25cm、深さ40cmほどある。P₁₀は径28cm、深さ26cmほどある。P₁₁は径15cm、深さ13cmほどある。P₁₂は径23cm、深さ9cmほどある。P₁₃は径28cm、深さ17cmほどある。

出土遺物（第15図20～24、第22図2～4・6）

土器片は34点、石器が5点出土している。第15図20は口縁部が「く」の字状に内に傾く。口縁端部には半截竹管状工具が引かれる。楕円区画状になる半隆起線の上にはC字状の刻みが間隔をあけて施される。区画内は沈線や刺穴でうめられる。下部はヘラ状工具による沈線が施される。21は半截竹管状工具による横方向の半隆起線が何本も施される。その間の空間を連続する三角形の陰刻（表面を三角形状に削り取っている）がうめる。胎土に白い粒を含む。22は半截竹管状工具で引かれた半隆起線上を、今度はヘラ状工具で左下がりの沈線を引いている。その後、より幅

広の半截竹管状工具で区画するような曲線を引いている。胎土に雲母を含む。23は半截竹管状工具で楕円区画をしている。20とよく似た胎土で雲母を多く含む。24は撚糸が施されている。

これらの上器は中期前葉に位置づけることができるだろう。

石器（第22図2～4・6）は、打製石斧2点、磨製石斧1点、磨石1点、石皿1点が出土している。打製石斧（3・4）は2点とも素材面を残している。石材は頁岩である。4は一方の側面にも自然面を残している。両端は欠けている。側縁部に加工が集中しており、横刃形石器として分類したほうがよいのかもしれない。152gある。磨製石斧（6）は刃部が欠損している。流紋岩製で（重量67g）現存長5.4cmある。側面に擦り切り痕が明瞭に観察できる。素材の両側から擦り切り、現状で2.2cmの厚さのうち、両側から合わせて1cm擦り切っている。このほか遺跡から出土した磨製石斧には擦り切りの痕は確かめられなかった。石皿（2）は、現状で28cm近くあり、もとはかなり大型の石皿であったと思われる。周辺には剥離痕がめぐる。

⑧ S B 9 (第4図、図版4-12)

調査区の東方で検出されている。大部分はかつて県道をつくる際に削られており、北側の隅を検出できただけである。東にはS B 8が検出されている。ここから西側は、柱穴あるいは土坑状の落ち込みがいくつかあって、さらに両側は遺構や遺物の見られない空白域が続く。

S B 9は、ほぼ円形のプランになるのではないかと思われる。一部の検出で全体の大きさを想定する難しさはあるが、あえていえば径3mほどの小型の住居であったようである。V層中にIII層の落ち込みとして検出された。

床面はほぼ平らである。壁は、もっとも高いところで6～7cmほど残っていただけである。北の隅に長軸50cm、短軸30cm、深さ7cmほどの落ち込みが見られた。住居にともなうなんらかの施設であったと思われる。

柱穴は一ヵ所検出されただけで、炉に相当するものも見つかなかった。P₁は径25cm、深さ39cmほどある柱穴である。細い柱穴であるが、意外と深くしっかりとしている。

出土遺物 (第15図25～28)

上器片が31点、石器の剝片が2点出土している。25は地文に撚糸が施されたようにみえるが、繩の節がまったくみえない。木口などを用いた条痕ではないかと思われる。胎土に雲母が多く含まれる。26は撚糸が施される。胎土に白い粒が多く含まれ薄手である。27・28半截竹管状工具によって斜行する沈線が施される。28はヘラ状工具によってさらに左下がりの沈線が引かれ、格子目状を呈する。ともに胎土に雲母が含まれる。

⑨ S B 10 (第3図、図版2-6)

S B 10はS B 5の西側1mほどの位置に検出されている。さらに、2.2mほど西側にはS B 11が検出されている。

北側はかつての道路工事のために壊されており、南側は用地外のため検出できなかった。不整形な円形のプランになるものと思われる。長軸で4.3m短軸3.3mほどの大きさが想定できる。東

に1mほどでSB5が検出されている。IV層中にIII層の落ち込みとして検出できた(SB5の床面との間には70~80cmの高さの違いがある。また、東壁と考えた部分も直線的であり、今考えてみれば断層線が走っていたのではないかと思う)。

床面はほぼ平らである。壁は、もっとも高いところで23cmほど残っていた。炉と思われるものは検出できなかった。垂れ飾りが西壁の近くで出土している。床面からは5cmほど上で見つかった。

柱穴は四ヵ所、東側に集まって検出されている。小さな二ヵ所の柱穴(P₁, P₂)をはさむようにして、P₁, P₄の柱穴が位置する。P₁は径40cm、深さ12.5cmほどの柱穴である。P₂は径18cm、深さ18cmある。P₃は径18cm、深さは26cmほどある。P₄は径40cm、深さ25cmほどの大きさである。

出土遺物(第8図11、第15図29~32、第16図1~7、第22図5、第24図1)

土器片が430点ほど出土している。石器は磨石が1点と石製垂れ飾りが出土している。第8図11は口縁部に撫糸が施されている。方向がまちまちであるので、回転させず押しつけられたものかもしれない。胎土に雲母や赤く酸化した粒が含まれる。

第15図29は内傾した幅広の口唇をもつ。半截竹管状工具による横方向の半隆起線が数本引かれる。半隆起線間の空間を上下に三角形状に表面を削り取ることで、交互刺穴状にしている。下部には地文に縄文が施される。この部分も表面を三角形状に削り取っている。胎土には白い粒が含まれる。30は半截竹管状工具で引かれて半隆起線に囲まれた空間に縄文が施されている。隆起の脇を間隔を空けて三角状に削り取り(刺穴によるものもあるかもしれない)、中心を丸く刺穴しているので、内部は「花びら」のように見える。同様な文様は第20図25などにもみえる。胎土に白い粒が含まれる。31は縦に垂下する半隆起線で構成されている。中央が高くなる山形の隆起が貼付されている。胎土に白い石の粒が多く含まれる。32は半截竹管状工具で右下がりに引かれた半隆起線を、ヘラ状工具で左下がりに引いて格子目状にしている。第16図1は縦横とともに半截竹管状工具で引かれている。2は縦方向は半截竹管状工具で引かれているが浅く、第15図32のように線と線の間が盛りあがった半隆起線状になるものとはちがって沈線状になる。3は地文に撫糸が施される。縦に半截竹管状工具による沈線が引かれ、その間を棒状工具による波状沈線が縦に引かれている。胎土に雲母や赤く酸化した粒が含まれていている。第8図11と同一個体になるものと思われる。4・5は地文に縄文が施される。ともに胎土に雲母を含む。4は半截竹管状工具によって縦方向に直線や波状曲線を引いている。5は中央が高くなる山形の隆起を貼付する。ヘラ状工具による沈線も施される。沈線の先端は三角状の切込みになるものと思われる。6は半円形の突起になる。地文に縄文が施されている。内側は突起の中央部がくぼむ。半截竹管状工具によって横方向に引かれた線もみえる。7も6と同様の半円形の突起であるが、円文が貫通している。器面が荒れて不明瞭であるが、縄文が施されていたようである。胎土も6にはみられない雲母を含む。

これらの土器は中期前葉(五領ヶ台式期)に位置づけることができよう。

石器は磨石が1点(第22図5)出土している。安山岩の河原石を利用している。半分ほど欠けているが、先端部および側面に擦痕がみえる。重量530g。

石製垂れ飾り（第24図1）は扁平な楕円形をしている。薄緑色をしており、全面がよく磨かれている。端によった中央に両側から穿孔した一孔がある。長さ2.65cm、幅1.85cm、重量は3.2gである。比重計算をしてみると約3.0になり、ヒスイ（比重3.3～3.5）とはことなる。

⑩ S B11（第6図、図版3-8）

S B11はS B10の西側に検出されている。円形プランの南側を検出できた。北側はかつて道路建設で破壊されたものと思われる。検出できた部分の残りはよく4本の柱穴も大きくしっかりとしたものであった。住居は径4.5mほどの大きさになるものと思われる。

IV層中にIII層の落ち込みとして検出できた。

床面はいくらくか西に傾斜している。壁は、もっとも高いところで13cmほど残っていた。

柱穴は四カ所検出されている。P₁は径50cm、深さ43cmほど。P₂は径40cm、深さ69cmある。P₃は径40cm、深さは45cm。P₄は径40cm、深さ56cmある。炉と思われるものは検出できなかった。

出土遺物（第8図12～14、第16図8～18、第22図7）

土器片が400点ほどと土製円板が1点（第18図9）出土している。石器は1点と凝灰岩・頁岩の剥片が数点出土している。第8図12は地文に縄文が施されるが、くびれ部に横方向に引かれた半隆起線から下は無文になる。口縁部から弧を描くような隆帯が貼付される。半隆起線の下は沈線を引いて幅の狭い空間を作り、ヘラ状工具で上下二段に刺穴を施す。上下の刺穴の位置は重ならず、交互刺穴状になる。無文部に三条の撚糸圧痕が施されている。胎土に白い粒や酸化した赤い粒を含む。

13（図版7-22・23）は口縁部に蓮華状文が施される。上部を三角状に削り取って作り出した「n」部にヘラ状工具で細い沈線を（多くは三本）付ける。その後、右下がりの細い沈線を重ねている。ただ、小さな四カ所の橋状把手をはさんで左下がりの沈線を重ねる部分もある。胸部は半截竹管状工具で縦横の半隆起線を引いている。橋状把手の下には渦巻状の文様をえがいている。渦巻状の文様の下には二本の半隆起線が菱形をえがくように垂下する。横方向の区画内や渦巻状の文様部分は、三角形状の刺穴（削り取り）を繰り返して交互刺穴文状の文様をえがく。胎土に酸化した赤い粒や石粒を含む。14は小型の浅鉢形土器である。非常に薄手に作られている。地文に縄文が施される。文様は半截竹管状工具による。胎土に雲母や酸化した赤い粒を含む。

第16図8は厚手の土器である。波状口縁になるのかもしれない。口唇部に刻みが施される。刻みの下には棒状工具による沈線と、刺穴がある。胎土に白い粒が含まれる。9は半截竹管状工具によって縦の沈線（半隆起線）を連続して引き、横区画内をうめる。さらに、これらのいくつかを包み込むように下から上に伸びる半隆起線が一カ所見えるところに注目しておきたい。10は半截竹管状工具で引かれた沈線状に刺穴が施される。11は縦方向の半隆起線文で構成される。12は半隆起線文で構成される。沈線部分にC字状の連続する刻みが施される。13は縄文が施される。横方向の隆帯を貼付したり半截竹管状工具で横方向の半隆起線を引いている。14は撚糸が施される。その後、半截竹管状工具で半隆起線を引いている。胎土に雲母が含まれる。15は口唇部に小さな隆帯が貼付される。16は半円形の突起と格子目文をもつ。突起部には内外面ともに縄文が施

される。内面にも半円形の小突起のすぐ下に、横方向の半隆起線が引かれる。17はいくぶん大きめの半円形の突起に円文が貫通する。内外面に繩文は確認できない。下部に格子目文をもつ。内面も円文の周囲など半裁竹管状工具でなぞっている。18の文様は太めの棒状工具によってえがかれている。隆帯も貼付される。胎土に白い粒が多い。手に持つと軽く感じられる土器である。

これらの土器の多くは中期前葉（五領ヶ台式期）に位置づけることができる。

石器は横刃状石器が1点（第22図7）出土している。重量は80gある。燧灰岩と頁岩の剝片は50gほどになる。

⑪ SB12（第5図、図版3-9）

SB12は調査区の北西側に位置する。西側はSB13と交錯しており、前後関係をはっきり確認できなかったが、後述するように床面上の遺物の検討からSB13より新しいものと判断した。南側は道路で削平されている。道路をはさんで南側にはSB5、SB10が検出されている。円形プランで直径4.5mほどになるものと思われる。

IV層中にIII層の落ち込みとして検出できた。

床面は西に傾斜している。壁は、もっとも高いところで15cmほど残っていた。北壁上に重なるように径65cm、深さ30cmほどの落ち込みがある。SB9にも同様な位置に落ち込みが見られる。その性格は不明である。

柱穴は八ヵ所検出されている。P₁は径12cm、深さ14cm、P₂は径13cm、深さ9cmと小さくて浅い柱穴である。対になっているように思える。P₃は径20cm、深さは24cm。P₄は径17cm、深さ34cmある。P₃とP₄の間に、床面を8cmほど掘りくぼめて（第8図15）の大型の土器が据えられたかのように出土している。SB5の例とは出土の位置に違いが見られるが、共通したところも多い。

P₅は径25cm、深さ28cmほどある。P₆は径30cm、深さ25cmほどある。P₇は径20cm、深さ22cmほどある。P₈は北側の壁と重なる位置にある。本住居にともなうものか疑問もあるが、計測値を記しておく。径28cm、深さ23cmある。柱穴の並びをみると中央部に空間が広がる形になる。

炉と思われるものは検出できなかった。

出土遺物（第8図15-16、第16図19-21、第22図8）

土器片が150点ほどと石器が1点出土している。第8図15（図版7-20）は床面上に据えられていた。胴部下半を欠く。口縁部付近を除き指頭痕痕が明瞭に残る。主文様は口縁部に集中する。口縁部には「つ」字状の隆帯が貼付されるが、多くは棒状工具による沈線で構成される。沈線に重ねて刺穴が施されている部分もある。四角の区画の中は下を三角形状に削り取った「U」字状の文様がつながる。胴部は横方向の二本の隆帯で区画される。この隆帯からは「し」字状に曲がる隆帯や底部近くまでつながる隆帯が下がる。胎土には白い粒が多く含まれる。

16（図版7-21）は15の土器の近くで横転していた完形の小形深鉢形土器である。三単位の波状口縁になる。波状口縁の一つに「つ」字状の隆帯が貼付されている。器面全体を半裁竹管工具による直線や曲線でうめ、間の空間はヘラ状工具による沈線で格子目状にうめる。ここも右下が

りの沈線が先に引かれている。

第16図19は斜行する沈線（半隆起線）とヘラ状工具による沈線でうめられた器面を、半截竹管状工具を用いて四角に区切っている。縄状把手がつく。20は口縁部近くには縄文を施している。横方向には半隆起線で区画される。縄文を地文に持つ部分はヘラ状工具によって下を三角状に削り、そこから直線を伸ばすことで連続する「U」字状の文様を作り出している。さらに、「U」字の真ん中には沈線を一本引いている。類似した文様は第17図14、第18図20、第19図13、第21図6などにもみられる。また、小川村窯遺跡の第5C類土器中や姥ヶ沢遺跡（報告書第25図3）の出土遺物中にもみられる。21は地文に縄文を施す。その後、半截竹管状工具によって縄や波状の沈線（半隆起線）を引いている。胎土には雲母や酸化した赤い粒を含む。

これらの土器は中期中葉（貉沢式期）に位置づけることができよう。

石器は石皿が1点出土している（第22図8）。重量は790g。もとは、周囲がていねいに整えられた楕円形の石皿であったのではないかと思われるが、一部を残すだけである。二方の割れ口には剥離痕が残る。安山岩の河原石を利用している。

⑫ S B13（第5図）

S B13は東側の一部がS B12と交錯する。前後関係をはっきりつかめなかつたが、床面上の遺物の検討からS B12より古い時期のものと判断した。南側はかつての道路建設とともに削平されている。西にはS B14がある。道路をはさんで南側にはS B10やS B11が検出されている。

円形（楕円）プランの北側半分近くを検出できた。住居は短軸3m、長軸4mほどの大きさになるものと思われる。

北側はV層上面で、南側はIV層中にIII層の落ち込みとして検出できた。床面は北と東側が高く、いくらか西と南に傾斜する。壁は、もっとも高いところで17cmほど残っていた。

柱穴は四ヵ所検出されている。P₁は径20cm、深さ18cmほど。P₂は径16cm、深さ29cmある。P₃は径22cm、深さは20cm。P₄は径23cm、深さ24cmある。壁際に柱が並び中央部に空間が広がる。しかし、ここに炉址を確認することはできなかった。

出土遺物（第9図18～23、第16図22～26、第17図1～22、第23図3～8）

土器片が450点ほどと土製円板が1点（第18図10）出土している。石器は7点出土している。第9図18（図版6-16・17）は口縁部から胴部にかけて半隆起線が引かれ、そのうち四本には連続するC字状の刺穴が施される。胴部には連結部を有する隆帶が垂下する。胴部の空間にはヘラ状工具によって格子目文が施される。胎土に白い粒を含む。

19（図版6-18）は小さな波状の口縁になる。口縁端部に空間を残して、その下から半截竹管状工具で七条の横方向の半隆起線が回る。口縁端部には縄文が施される。半隆起線の間の沈線に重ねてヘラ状工具による刺穴が連続する。この間に連結部を有する隆帶が施される。胴部には半隆起線が4、5本単位で密に施される。その間の空間の両側は逆「ハ」字状の刺穴が連続して施されたり、半隆起線による「B」字状文や連結部がみられる。胎土に雲母を含む。

20~23は地文に縄文が施される。21は口縁部に四角のかわった刺穴を連続させている。蓮華文を意識したものなのだろうか。胴部には結節縄文がみられる。22は折り返し口縁になり、胴部には結節縄文がみられる。23は半截竹管状工具によって区画された空間に格子目文を施したよう見えるが、順は逆で、縄文が施された後、格子目文を施し、半截竹管状工具によって横に区画している。格子目は右下がりが半截竹管状工具で、左下がりがヘラ状工具で施されるところは他の例と共通している。これらの胎土には21をのぞき雲母を含む。

第16図22は口縁端部に北陸地方からの影響を受けた蓮華文が施される。上部の空間を削り取りヘラ状工具によって沈線（三本）を引いている。胎土に白い粒が含まれる。23は波状口縁になる。22と同様、蓮華文が施される。大ぶりで22よりくだけた感じである。24は地文に縄文をもち、半隆起線の脇に刺穴が施される。26は口縁端部に縄文が施される。無文部をはさんで半隆起線が回る。半隆起線上に精円形の隆帯が一つ貼付されている。この貼付された隆帯の上には、後に半截竹管状工具で引かれた横方向の沈線がみえる。25は撚糸文が施される。半隆起線によって区画される。胎土に白い粒が含まれる。第17図1は縄文が施され、口縁部には半隆起線が密に回る。途中先の平らなヘラ状のもので半隆起線上について（刺穴というより長めに押す）交互刺穴状にしている（同じ方向からついているが、一つおきに位置をずらしている）。2は隆帯が垂下し、周囲は半截竹管状工具によって密に施紋される。交互刺穴状になる部分や沈線上に刺穴を加える部分もある。3は半隆起線の間に格子目文が施される。交互刺穴状になる部分や沈線状に刺穴を加える部分もある。4は半隆起線によって囲まれる文様構成となる。器面が荒れていて不明瞭だが、交互刺穴状になる部分もある。5は半截竹管状工具によって引かれた連絡部がみえる。6は半隆起線の脇に上から下に押し引いている。7・8は同一個体になるのではないかと思われる。口縁部に縫・右下がりの沈線を棒状工具で施し、胴部は沈線で四角に区画する。胎土には雲母を多く含む。9は半截竹管状工具による半隆起線の脇に刺穴が施されている。10は内側が折り返し口縁状にふくらむ。口縁端部には連続する刻みが施される。11は外反した口縁に細い格子目文が施される。格子の方向が他の例とことなる。12も格子目文が施される。13の口縁には円文と三角文が貫通する。14は口縁端部に「C」字状の刺穴が連続する。下部を削り沈線で区画した「U」の中はヘラ状工具で斜めに4~5本、次いで中央に縫の沈線が一本施される。15は半隆起線が綾杉状に密に施される。16は地文に結節縄文が施され隆帯が垂下する。17~22は地文に縄文が施されている。17は隆帯が垂下する。隆帯の左右に半隆起線も引かれる。21は口縁端部下に沈線を施し、その上を指先のようなものでなぞることで、下部との区画を付けている。22はかなり大きな個体になる。胴部に屈曲する隆帯が貼付される。隆帯状にも縄文が施されているようだ。

これらの土器の多くは中期前葉（五領ヶ台式期のなかでは新しい部分）に位置づけることができる。

石器（第23図）は打製石斧4点、磨製石斧1点、凹石1点、敲石1点が出土している。打製石斧（3~6）は頁岩（3~5）と凝灰岩（6）を素材としている。素材の自然面を残すものが多い。

3は掘り棒のような形をしており本遺跡では唯一のものである。78gある。

9は、小型の磨製石斧である。刃部の一部を欠く。流紋岩製で32gある。7は凹石である。安山岩製。割れ面は削られたようになっている。裏は平らに整形されている。120gある。8は敲石である。三方に細かな剝離がある。砂岩製で33gある。

⑬ SB14(第5図)

SB14は調査区の北西端で検出された。東にはSB13が検出されている。また、道路をはさんだ南にはSB11が検出されている。この付近は台地の縁の部分にあたるため堆積しているIII・IV層も厚く、遺物の出土も多かった。住居のプランを確認できないうちにIV層中に石組み炉を検出することになってしまった。南側はかつて道路建設で削平されている。

石組み炉の周辺は床面も硬くはっきりしていたので、ここから出土したものをSB14出土遺物としてとりあげてある。本来はさらに多くの遺物を含んだはずである。

床面は石組み炉周辺では硬くはっきりしていたが、周囲に広がるにつれ不明瞭であった。

本住居址にともないそうな柱穴は六ヵ所検出されている。P₁は径20cm、深さ27cmほど。P₂は径15cm、深さ14cmある。P₃は径14cm、深さは13cm。P₄は径18cm、深さ35cmある。P₅は径16cm、深さ18cm。P₆は径22cm、深さ12cmあった。いずれも小さくて深さも浅いものばかりで、はっきりしないが、これらがみな住居址にともなうものならば、径6mはある大きな住居であったと思われる。

出土遺物(第17図23~28、第18図1~7、第23図10~13)

土器片が130点、石器が6点出土している。第17図23は大きめの半円形の突起に貫通する円文をもつ。胴部には格子目文が施される。突起の内外には縄文が施される。24は格子目文をもつ。口唇部には縄文が施される。25からは右下がりの半隆起線を引いた後、「B」字に似た曲線を引き、最後にヘラ状工具によって左下がりの沈線を引いている様子がわかる。26・27は隆帯や半隆起線で構成された空間に三角形の陰刻(削り取り)が施される。28は隆帯の脇に沈線が施される。胎土に白い粒が含まれる。第18図1~6は地文に縄文が施される。1は内傾する口唇の幅が広がる。口縁部付近は横円区画が連続する。第20図17・18と同一個体になるかもしれない。2の胴部は縦の区画が連続する。1などと接合するかもしれない。3は口縁部に半截竹管状工具で横に沈線(半隆起線)が引かれる。4は隆帯の右脇にのみ沈線がみえる。5は隆帯と半隆起線がみえる。6は垂下する隆帯と半隆起線が器面をうめ、間に棒状工具による波状文が描かれる。7は指頭圧痕文の施された胴部に隆帯が垂下する。胎土に白い粒が多く含まれる。

これらの土器の多くは中期前葉(五領ヶ台式期のなかでは新しい部分)に位置づけることができる。

石器は打製石斧2点、凹石1点、敲石3点が出土している(第23図10~13)

打製石斧は2点とも安山岩を素材としている。ともに片面には素材の一部が剝離されずに残っている。10は一端を欠く。厚手で重量は143gある。11は小型であるが全体の形を知ることができる。重量は85g。

凹石（12）は磨石や敲石としても利用されたようで、先端部は面をなすほど摩滅している。安山岩の河原石を利用している。

敲石（13）は、磨製石斧を再利用したものである。刃部側が欠損したのち、基部の先端を敲石として使用している。つぶれた表面の様子がはっきり観察できる。流紋岩製で重量は148gある。磨製石斧を敲石に再利用したものは遺構外出土の石器の中にもみられる。

（2）土坑

① SK 1（第4図）

SK 1はSB 9の北西3.3mほどの位置で確認された。この付近は15~20cmの耕土下はわずかで第V層に達するため、第V層への落ち込みとして表土を剥いですぐに確認できた。

土坑は長径82cm、短径70cmの楕円形をしている。深さは21cmほどある。

出土遺物 繩文をもつ土器数片と磨製石斧1点が出土している。整理がおくれ固化できなかつたが、ほぼ完形の流紋岩製磨製石斧である。

② SK 2（第6図、図版5-13・14）

SK 2は調査区の中央付近で検出された。この付近も15~20cmの耕土下はすぐ第V層に達する。このため表土（耕土）を剥いですぐ第8図17の土器がみつかった。周囲を精査して土坑の範囲を確認した。すぐ脇にはSK 3も検出されている。

土坑は長径92cm、短径67cmの楕円形をしている。土坑の上部は耕作にともなって攪乱されており、深さは第V層に掘り込まれた6cmほどしか確認できなかった。土器は口縁部を下にして据えられていた。口縁部付近には平らな石が2個みつかった。土器が逆位に置かれたあと、石が置かれたものようである。

出土遺物 第8図17は耕作によるためか、胴部下半は欠けている。地文に繩文が施されている。径40cmもある大型の土器であるが薄手に作られている。

③ SK 3（第6図）

SK 3はSK 2のすぐ脇で検出された。径52cmほどの円形をしている。深さは第V層に掘り込まれた10cmほどしか確認できなかった。土坑内からは土器片と敲石が出土している。

出土遺物 土器片が3点、敲石が1点出土している。土器はすべて繩文が施されているが、小片で器形等不明である。敲石（第23図14）は砂岩の河原石を利用している。長さ14.8cmと大きめで、重量も580gある。先端と側縁につぶれが観察できる。

SB 2とSB 3の周辺にからは柱穴状の穴や土坑状のくぼみがいくつか確認されている。

（小柳）

3 中世の造構と遺物

(1) 土坑

① SK 4 (第6図、図版5-15)

黄褐色粘質土(V層)への黒色土(II層)の落ち込みとして検出された。縦60cm、横20cmほどの大さで、ほぼ長方形をしていた(第6図)。きわめて小型の土坑である。深さも7cmほどしかないが、もとはもっと深かったものと思われる。中から刀子が1点出土した。刀子は切先を南に(刃部を西)して、水平に近く置かれた状態で検出された。

土坑は刀子を納めるのにほどよい大きさであり、刀子を納めることを強く意識したものと思われる。精査したが土坑内からは他に出土遺物がなかった。

遺跡内からも縄文時代以降の造構や遺物は検出されておらず、土坑の時期をはっきりと特定できる資料は見当たらない。しかし、村内からはこれまで古墳はもちろん、古墳時代の造構・遺物も発見されておらず、この刀子も古墳時代以降のものと思われる。

出土遺物 刀子(挿図2、図版12-51)が1点出土している。切先の一部を欠くが、全容をつかむことができる。現存長が26.2cm、刀身の最大幅は2.4cmある。反りのない、いわゆる直刀である。背の厚さが4mm、重量は100gである。



挿図2 SK 4 出土の刀子

刀身の先端はややふくらみを持ち、鍔を持たない半造りになる。断面は二等辺三角形になる。関は背の部分が鍔ではっきりしないが、両側にあるように見える。基は8.6cmほどの長さがある。一部に木質部が付着している。

目釘孔は鍔のためはっきりしないが、それを思わずくぼみが一ヵ所みられる。

「赤塙」の地名の初出は鎌倉時代の嘉暦四(1329)年にさかのぼる古い地名であるが、中世の赤塙は現在の集落の北はずれの八幡神社周辺に位置したと考えられている[1]。遺物の分布などからも調査地周辺に集落が存在した様子はみられないようである。また、城館の伝承もなく、地形的にもその可能性は低い。

最近、中野・飯山市方面で中世の刀子とともにう墳墓や造構が発見されており[2]、やはり本例も墳墓にともなったものではないかと思われる。

(小柳)

註

1 三水村誌編纂委員会 1980「村々のはじまり 赤塙村」「三水村誌」P347

2 飯山市教育委員会 1985「長者清水・水の沢遺跡」

4 造構外出土の遺物

(1) 縄文時代の土器 (第7図9・10、第9図25・26、第10・11図、第18図17~26、第19~21図)

よく知られた遺跡だけあって、土器もかなりの量が出土した。最も古い遺物は前期後半までさかのばるが、それも1点のみである。他は、住居址出土の土器とよく似ており、ほぼ同時代のものが中心であるといえる。

第7図9と第9図25は指頭圧痕文土器である。ともに口縁が開く深鉢形をしている。25には隆帯が垂下する。胎土に白い粒を含む。

第7図10(図版8-30)は口縁が開く深鉢形をしているが、胴部もふくらむ器形になる。半隆起線によって縦に区画された空間に、ヘラ状工具による縦の沈線が施される。口縁端部まで施されているようにもみえるが、器面が荒れていてはっきりしない。内面にこげつきが黒く残る。

第9図26は半隆起線の間を格子目文でうめる。縦の無文部には交差刺穴を施す。胎土に石粒が含まれる。

第10図27・28はいくぶん内湾気味になった口縁が外に開く形の深鉢である。27(図版8-26)は4単位の波状口縁となる。突起は先端の間がくぼんだ山形になる。口縁端部は無文部となり、その下に隆帯が回り、さらに横方向の半隆起線が施される。半隆起線にはさまれた横区画には、上下に刺穴を連続させたり、三角の切り込みをいれる。再び隆帯をめぐらして胴部は縦区画の文様帶となる。区画内は、矢羽状に刺穴を連続させてうめる。胎土には白い粒や石粒が含まれる。

28(図版7-24・25)は口縁部は上下2本の隆帯で区画し、間に棒状工具で深く引いて半隆起線状にしている。胴部は棒状工具で施文する。三角陰刻文や棒状工具の先端で突いた円文、27の胴部にもみられた「人形」状の文様など特徴的な文様がつけられる。この間を下の隆帯から伸びた隆帯が胴部に斜めに垂下する。隆帯は途中楕円形状にふくらみ二本に分かれ、平行に「匂」状に下がる。底部に近い部分は、棒状工具で縦の沈線を施している。胎土には白い粒や酸化した赤い粒を含む。

第10図29は細長い深鉢になりそうだ。隆帯が垂下する。隆帯脇には三角陰刻文も施される。胴部は格子目文が施されるが、ヘラ状工具による沈線が疎である。胎土に雲母を含む。

30(図版8-27)はキャリバー形の深鉢である。口唇部には湯を巻いた隆帯が貼付される。口縁部には押し引き文も施される。胴部には隆帯のめぐる楕円区画がつくられる。区画内は波状沈線や刺穴、三角状の切り込みなどでうめられる。下部には沈線でうめられた楕円区画もみえる。胴部も弧をえがくような隆帯がつく。縫をめぐらるように波状沈線が施されている。内面はよくみがかれている。胎土は細かで砂粒などほとんど見られない。

31(図版8-31)は口縁部の突起から下がる渦巻きの隆帯がつく。口縁端部の無文部の下には

左下がりの沈線や波状沈線が施され、胴部は梢円区画になる。胎土に白い粒を含む。

32(図版8-28)は横方向の半隆起線の下部に、斜行する渦巻状の隆帶や抽象的な隆帶が貼付される。隆帶の下は半隆起線の連弧文がめぐる。この間には、三角陰刻文や押し引き文が施される。底部近くは、間隔を開けた縦の半隆起線が施される。胎土に石粒が多く含まれる。

33は半隆起線や沈線で区画された空間に刺穴が密に施される。底部付近には波状沈線も施されている。胎土には白い粒が含まれる。

34(図版8-29)はキャリバー形の深鉢である。口縁端部には爪形文が連続して施される。31でも見られるような波状突起から下がる渦巻状の隆帶がつく。胴部は梢円区画となり波状沈線や刺穴でうめられる。口縁部文様帶とくらべる胴部の文様構成には新しさがみえる。

第11図35は口縁部が内湾する。半隆起線が密に施される。沈線部分に刺穴が施されているところもある。「し」に近い形をした隆帶が口唇部から貼付されている。

36も半隆起線が密に施されている。三角陰刻文もみえる。内面にも半截竹管状工具で引かれた半隆起線が1本みられる。胎土には35・36とも、白い粒や酸化した赤い粒が含まれる。

37は口縁がいくぶん開き気味に立ち上がる深鉢である。横方向の区画には交互刺穴が施される。ただ、最上部の区画の刺穴は、上の刺穴の数の方がはるかに多い。胎土に雲母が含まれる。

38・39は繩文が施され、半截竹管状工具による沈線(浅い半隆起線)が引かれる。39には隆帶も垂下する。ともに胎土には雲母が含まれる。

40は口縁端部に刺みが施され、1cmほどの粘土塊が貼付される。胎土に雲母が含まれる。

第18図17の口縁部端部には連続する爪形文、その下には上下交互に三角形文様を削り込んだ三角陰刻文が施される。北陸地方の前期後半を代表する鍋屋町式土器である。18も北陸地方の影響を受けた蓮華文が胴部に施される。半截竹管状工具の端部を利用して半円を連続して押して、蓮弁の上端を表現している(刻印蓮華文)。半円の下にヘラ状工具で細い沈線を引く。

19~24は半截竹管状工具で引かれた半隆起線上に刺穴(爪形文)が施される。19は椀状の器形になるのだろうか。胴部文様は棒状工具によって施される。20は地文に繩文が施される。半隆起線の間に下部を削り取って「U」状に連続させる文様を施す。21は繩文の施された胴部に半截竹管状工具による波状沈線が引かれる。22も地文に繩文が施される。口縁下の横方向の狭い空間は刺穴と左下がりの沈線が交互に施されているようである。23は口縁下の横方向の空間に「匁」状の半隆起線を引き、中を縦の半隆起線でうめている。24は爪形文が「D」状になる例である。長さ2cmほどの粘土塊が上下に貼付され、周囲に2つ一組の三角の切り込みが施されている。

26は隆帶上の左右に刺穴が施され「ハ」状になる。小さな梢円内には横方向の沈線が施されている。胴部の沈線は棒状工具による。胎土には白い粒が多く含まれる。

25・第19図1~7は沈線上やその脇に刺穴が施されるものである。25の沈線は棒状工具によつて引かれている。胎土には白い粒が多く含まれる。第19図1は隆帶上にも刺穴が施される。胴部に棒状工具による波状の沈線が引かれる。繩文は胴部にわずか観察できる。2は台形状の波状口

縁になる。口唇部にも刻みが施される。5は撫糸が施されている。胎土に白い粒が含まれる。

8は浅鉢形になるものと思われる。表面は無文、口唇部および内面に連続する刺穴が施される。胎土には白い粒や石粒が多く含まれる。

9・10は脣部に密に刺穴が施されているものである。9は半隆起線と弧状の沈線に囲まれた内部を刺穴でうめている。ともに白い粒が含まれる。

11～13は脣部に斜行する沈線を施すものである。11は三角陰刻文や沈線上の刺穴、波状沈線などが施され、下部で3～4本の隆帯が渦を巻くように絡み合っている。斜行する沈線は同じ区画内の三角陰刻文をはさむようにして右下がり、左下がりに施されている。口縁端部の狭い横区画は無文帯になる。12・13は胎土に雲母を多く含む。13の口縁部は棒状工具で斜行する沈線を引いた後で切り込みを入れている。半隆起線の下の縁の沈線は半截竹管状工具で引いている。

14～17は口縁部文様帯に集合沈線をもつ土器である。14～16は半截竹管状工具で浅く沈線を引き、その後、口縁端部の横方向の半隆起線を引いている。15・16の胎土には雲母を多く含む。17は口縁端部から半隆起線が縦に施され、その後、下部の半隆起線を引いている。

18～22は円文が貫通する波状口縁である。18の円文周囲には内外とも網文が施される。脣部は格子目文になる。20は内面に撫糸が施され、円文を囲むように半截竹管状工具によってなぞられる。21は円文の脇から半隆起線が密に施される。22の貫通する円文の脇に三角形をもつところは第17図13の土器と似ている。しかし、22の三角形は貫通しておらず、削られてつくられたものである。下部にも小さな三角陰刻文がみえる。

第20図1～4は指頭圧痕文をもつ土器である。1の胎土は白い粒を含み、2～4は雲母を含む。2は梢円（耳形）の隆帯を貼付し、隆帯状には幅広の爪形文を施している。3も脣部に隆帯が貼付されている。

5は浅鉢形の土器になるものと思われる。棒状工具で引かれた沈線が密に施される。内面にも棒状工具の先端で突いた円文や三角の切り込み、刺穴などが施される。

6は口縁端部と半隆起線で区切られた狭い空間を、縦方向の半隆起線でうめる。（実際は縦の半隆起線→横の隆起線の順）。内面にも横方向の半隆起線がめぐる。7は口唇部が中に折り返されるのが特徴的である。口唇部につながる隆帯で口縁部を区画する。隆帯の一方の脇には沈線がめぐる。区画内の中央には（波状）沈線が施されるようである。胎土には細かな石粒が多く含まれる。小さな破片であるが、手で持つと思ひのはかずしりと感じる。

8～10は口縁端部から口唇部にかけて刺穴（爪形文）が施される。8は沈線ではさまれた無文部に交互刺穴も施される。9は口縁端部と口唇部に、いくぶん幅広な刺穴を連続させる。その下は太目の刺穴を交互に施しているので波状の隆起線状にみえる。10の口唇部は先端が三角状になる。爪形文の下は半隆起線文が横位に密に施される。8～9の胎土には白い粒を含む（9は雲母も含む）。

11は内湾する口縁部の端に「の」状の隆帯がつく。棒状工具で引かれた沈線や三角陰刻文、刺

穴などが施される。胎土には白い粒が多く含まれる。

12は隆起線で囲まれた区画の内側に小さな三角陰刻（刺穴）が並んで施される。

13は半隆起線が連弧を描く。14は口唇部から「し」状の隆帯が下がる。これを取り囲むような半隆起線も施される。15は半截竹管状工具による半隆起線によって口縁部の文様帶が（横円に）区画されている。胎土に白い粒を含む。

16は撚糸のようにも思えるが、よく観察してみると上から下へ連続する条線の中に繩文の節がみえない。どうやら器面全体を半截竹管状工具で浅く引いているようである。上部には半截竹管状工具で引かれた沈線がはっきりみえている。胎土に雲母や酸化した赤い粒を含む。

17~25、第21図は地文に繩文や撚糸をもつ。17・18は同一個体のようである。口唇部が広がり、端は三角状になる。全面に施された繩文を半截竹管状工具で（横円に）区画している。胎土に雲母を含む。19・20も同一個体のようである。口唇部は三角状になる。折り返し口縁状になった口縁端部に繩文を施す。7~8本引いた半隆起線の途中の一部に交互刺穴を加える。半隆起線から下部は無文である。胎土に白い粒を含む。

21は隆帯を貼付した後、上部は隆帯に沿って半截竹管状工具をめぐらしている。隆帯の下は綫の半隆起線で区画されている。22からは繩文施文後に左下がりの沈線を引き、その後に半隆起線（綫→横）を施文しているという順序がよくわかる。23は横方向は半隆起線で、綫は沈線で（四角に）区画している。24は繩文の有無を抜きにすれば、13とよく似た文様構成の土器である。施文順序は連弧文の後に横の半隆起線が引かれる。25はまわりを削って花びらのような文様をつくりだす。第21図1・2は半隆起線による波状文や直線が引かれる。1は貼付された隆帯の上を半截竹管状工具で引いているのではないかと思われる。3と4は上から「U」「O」「N」に連なる文様構成が似ている。しかし、4は地文が無文で、幅広の内部の空間に撚糸を施す違いがある。時期差があるのかもしれない。4はSB4（第14回20）の土器と同一個体になる可能性がある。

6は半截竹管状工具によって口縁端部に沈線を引いている。下部を三角状に削ってから切り込みを入れて大きな「U」を連続させ、内部に綫に沈線を引く。7は沈線により（四角な）区画をつくりだす。8は横方向の沈線が上下に施されている。口唇部には2cmほどの粘土塊が貼付される。粘土塊の表面には半截竹管状工具で綫に沈線が引かれる。この2cmほどの粘土塊を貼付する土器はほかにもみられる。

9は口唇部が内側にはり出る。繩文施文後に半截竹管状工具で浅く「U」状の文様を描いている。10・11は繩文施文後に半截竹管状工具によって波状の沈線を引いている（左右にひねるようにして引く）。13は橋状の把手の部分。15~17は折り返し口縁状になる。15は前期にさかのぼるものかもしれない。18・19は波状口縁になる。

5・12・14・22~24は地文に撚糸をもつ。14は口唇に刻みが施され、隆帯が弧状に下がる。5・12・23は撚糸の施文後に半隆起線が引かれている。22は撚糸圧痕である。

このほかにも、有孔錫付土器の破片（数片）を含め多くの遺物が出土している。

これら遺構外出土の土器は第20図1～4の一群のように中期中葉（貉沢式期）に位置づくものもあるが、多くは、中期前葉（五領ヶ台式期に並行する時期）に位置づけることができるものと思われる。

（2）土製品

① 土偶（第11図～13図）

ア 出土土偶

上赤塙遺跡からは13点の土偶が出土した。このうち10と11の足は一対と思われ、個体数は12となる^[1]。北信地域では、縄文中期の土偶はこれまで12遺跡から86点が発見されているにすぎない。上赤塙遺跡から出土の13点という数は、銀山市の深沢遺跡や中野市の姥ヶ沢遺跡につぐ出土数ということになる。

上赤塙遺跡出土の土偶の特徴を頭部・胸部・脚部の三つの部分に分けて記してみたい。

第11図1・2（図版9-32・33）は頭部である。1は逆三角形（三角錐）の頭部で、頂では髪が二ヵ所並んで渦を巻くような表現をしている。この髪の表現は北陸方面に多くみられる。首は絞られて細くなる。顔にあたる部分は平らになでられており、顔面を表現しようとしているのがわかる。目と口の部分だけを丸い棒状のもので刺して表現している。口は目よりも深く刺している。現在長2.6cm。

2も似た形を示すが、鼻の表現がみられること、頭部に渦を巻く髪の表現がなく、三孔が施される違いもみられる（詳細はSB3の記述を参照願いたい）。

図版9-36は永野氏の上赤塙遺跡表採資料であるがここで簡単に紹介したい。小さいほうは、2と似た輪郭の頭部である。しかし頭部は扁平で、顔面も中央がくぼみ、ハート型に近くなる。目と口は細い棒状のもので刺して表現し、さらに、左右の目には斜めの切り込みがみられる。顔面と頭部との境は浅く沈線がまわり区別される。鼻は一本の細い線で表現される。頭頂部は平らで髪の表現や孔はみられない。現在長3.7cm。大きいほうは、顔面の半分を欠くが、上赤塙遺跡から出土している頭部の中では最大になる。目と口は太い棒状のものを深く刺して表現している。鼻にあたる部分はいくぶん表面が凸になっているので、2のように表現されるのかもしれない。首の正面と後ろは縦方向の竹管を、顔面の左右の側面は横方向の竹管が引かれている（後頭部は欠けている）。破片の下部には、「ほぞ」がはっきりとみえている。現在長7.4cm。

第11図3・6、第12図7・8は胸部破片である。3（図版9-34・35）は他の土偶とは様相を異にし、小型で板状の土偶である。上部は一部剥離しているものの現状と大きくなることはなく、頭部が乗るような様子はない。下部の孔をはさむ部分が脚部を表現するのだろう。図示した表面上部には、目・口を表現したかのような沈線と刺穴がみられるが、はっきりしない。

表面には浅く細い刺穴が連続して施される。中央には上下に刺穴が連続し、上部は大きめの口を表現したかのような部分を左右に分かれて刺穴し、目を思わす沈線の下で止まる。下部は穿孔

された部分まで連続する。両側にも弧を描きながら連続する刺穴が施される。下端の穿孔部には横方向に連続する刺穴がみられる。側面には両脇ともに一条の沈線がみられる。

裏面は、中央背骨のあたりを上下に刺穴が連続する。右端の中ほどにも刺穴が連続する。このほか、上下の端にも横方向に刺穴がみえる。現在長5.0cm。

6は胴部の小破片で全体の様子がつかめない。7・8に施されているような腹部の逆ハート形を描く沈線の一部と思われるものがみえる。現在長4.7cm。

第12図7・8は製作技法的にきわめて特徴がみられる。7では胴部にはぞ穴をもうけて頭部と脚部をつないでおり、ほぞ穴には欠けた頭部のほぞ穴が残る(図版10-38)。ほぞ穴は左右の脚部の付け根もあり(図版10-41)、頭部と脚部は別につくって胴部のほぞ穴にはめ込んでいる様子が確認できる。腕は胴部と一緒に作り出しているようである。また、腹部のふくらみは円盤状に剥離しており、やはり胴部と別づくりしているようである。乳房は突出し、腹部も大きくふくらみ、妊娠している女性をかたどっている(図版10-39)。文様は肩・脇腹・腹(下腹部)・尻の部分に細い沈線でえがかれる。腹部と尻は連続する逆ハート形でも表現される。背中には背骨を表現すると思われる太い沈線が上から下に引かれている(図版10-40)。現在長10.1cm。

8も胴部の破片である。7と同様に左右の脚部の付け根にはぞ穴がもうけられている(図版11-44)。頭部との接合状況は、はっきりしない。乳房は二カ所とも丸く剥離しており、7の腹部のように胴部と別づくりしたものと思われる。へそは「でべそ」で、胸から「でべそ」まで細い沈線が引かれる。腹部は7と同様に逆ハート形の沈線に囲まれる(図版11-42)。背面はやはり7と同様に太い沈線が引かれるが、他の文様は少ないようである。尻の部分には低い隆起が弧をえがくように残る(図版11-43)。現在長11.9cm。

第11図4・5、第12図9、第13図10~13は脚部の破片である。4は細い沈線が一方にまとまって上から下に12本引かれている。おそらく左足であろう。現在長3.6cm。

5は足首付近に三本の細い沈線がまわっている。現在長2.0cm。

9(図版9-37)は隆起を張りつけたようにみえるが、太く深い沈線をめぐらしてできた凸部を整形しているのではないかと思われる。上部は脚部のほぞ穴にはめ込むために先を丸めるようていねいに整形している。胎土には細かな白い粒が多く含まれる点など一見して他の土偶と様相を異にする。現在長6.5cm。

10と11は胎土や文様のつけ方がよく似ている。胎土は全体的に黄白色で、白い粒や礫化したらしい茶っぽい粒を含む点や、先のとがったへらのようなもので勢いよく施紋している点から、同一個体と思われる。10は右足(図版11-46)、11は左足(図版11-46)を表現しているものだろう。10の現在長が4.0cm。11の現在長が4.1cmある。

12は細い線でたくさん施紋されている(図版11-47)。上部はうず巻きや斜めの曲線、中央部は横方向の施紋が多く、下部にはほとんど見られない。現在長4.5cm。13は足の形や施紋の位置から右足を表現したものなのようである。これまでの脚部の表現する足とはことなり、つま先までしつ

かり表現されている。かかとの部分は欠けているが、現存長で6.1cmあり、かなり大型の土偶になるものと思われる。

以上の土偶も造構外出土土器と同様に、縄文中期前葉（五領ヶ台式並行期）から中期中葉（落沢式期）にかけてのものであろう。

イ 土偶の製作技法

すでに述べてきたように上赤塙遺跡の土偶の製作技法の大きな特徴は、頭部、脚部を胴部に設けたほぞ穴にはめ込むことによって製作している点にある。

脚部を胴部に設けたほぞ穴にはめ込む「ソケット式」は山梨県駿河堂遺跡等での所見をもとにすでに指摘されているところであるが、その割合はわずかで、これまで主たる製作技法は個々の粘土塊を合わせて土偶を作る方法で、この合わせるとき、しばしば木芯を利用する「分割塊製作法」と考えられていた^[2]。ほぞ穴にはめ込む技法が集中するのは遺跡周辺地域での特徴である。

頭部では、目・口を棒状のもので刺すようにして表現している点も特徴的である。また、隆帯を貼りつけて「まゆ」を表現する方法も見られない。

胸部の背中に縦の幅広の沈線を引き背骨を表現している点や、8のような「へそ」の表現方法も特徴といえる。

こうした特徴は、他地域への広がりを見せるものか、まだ確認できていないが、今後注意をしていきたい点である。

上赤塙でみられた「ほぞ・ほぞ穴」方式の土偶の製作技法については、（細部でことなる点もあるが）中野市姥ヶ沢遺跡と県埋蔵文化財センターで調査した豊田村風呂屋遺跡（未発表）出土の土偶の観察からも確認できた。さらに新潟県・富山県などに広がりそうな感触を得ており、北信濃から北陸方面にかなり特徴的な技法として存在するようである^[3]。

② 土製円板

造構内から3点、造構外から6点の土製円板を確認している。すべて土器片を加工している。大きさは3~5.5cm程度、重量は10~40gの間におさまる。

土製円板の用途については、祭祀具・遊戯具・冥錢・土器面調整具・漁労にともなう用途など諸説あるが、確定的なものはない^[4]。最近は「トイレットペーパー」のかわりに使用したとの説もでている^[5]。

このほかの土製品は確認できていない。

註

1 このほか後述する表面採集されている土偶の頭部が2点ある（図版9-36）。このうち小さなものは上田博物館1977『千曲川水系の土偶』で写真紹介されている。

2 小野正文 1986『駿河堂II』山梨県教育委員会ほか

3 土偶については、宮下健司氏のご教示を得た。そのさい「ほぞ穴」をもつ同様な技法が豊田村風呂屋遺跡の土偶に見られることや北陸地方の影響を受けているのではないかというご教示もいただいた

た。そこで『中部高地をとりまく中期の土偶』などの図版から、中野市姥ヶ沢遺跡や新潟県・富山県にも同様な技法が見られそうなことを確認した。このうち風呂屋遺跡と姥ヶ沢遺跡の土偶は、それぞれの機関のご好意により実見できた。

- 4 川吉謙二 1996「土製円板小考」『のじぎく文化財保護研究財団紀要創刊号』P101~110
兼康保明 1996「縄の円板」『考古学推論帖』大巧社
- 5 山下孝司 1997「土製円盤私考」『八ヶ岳考古』北巨摩市町村文化財担当者会

(3) 縄文時代の石器

① 石 鋸 (第24図16~20)

14点の石鋸が出土している。16・19・20は完形品であるが、そのほかは破損している。石質はすべて黒曜石製である。

② 打製石斧 (第25図1~11)

76点の打製石斧が出土している(図版12~49)。片面あるいは両面に自然面を残す個体が多い。また、使用時あるいは製作時に破損したと思われる石斧が多く、出土数の76点も前後する可能性がある。石斧の石材は頁岩と凝灰岩に限られる^[1]。頁岩製(1~3、5・6、8~11)が63点(重量5,830g)、凝灰岩製(4・7・10)が13点(重量1,135g)になる。

上赤塩遺跡では、板状の素材を加工して打製石斧も製作していたようで、10cm以上もある縦長の剥片や表面に剥離面を残す剥片が多く出土している(図版12~50)。

もっと多いのは、打製石斧と同様に頁岩の剥片で、230点ほど出土している。重量は3,045g(最大295g)になる。凝灰岩の剥片は47点出土し、その重量は1,065gになる。

打製石斧と剥片との出土量を比較してみると、頁岩製打製石斧:凝灰岩製打製石斧は約5:1であるのに、頁岩製剥片と凝灰岩製剥片は約3:1となる。また、頁岩製打製石斧と頁岩製剥片では約2:1、凝灰岩製打製石斧と凝灰岩製剥片は約1:1となる。

1点の打製石斧を製作するのにどれだけの剥片がでるのか把握していないが、上記の大ざっぱな割合の違いからみて、すべての石斧の製作の全工程が行われたとはいえないようである。一部は刃部の再生だけであったり、調査地とはことなる地点で製作が行われたものもあったのだろう。

③ 磨製石斧 (第25図22~24)

磨製石斧は5点出土している。石質はすべて流紋岩である。22のような大きめのもの、23のようないくぶん小さめのもの、24のようにごく小型のものがある。22は刃部に刃こぼれやつぶれが残り、敲石として再利用されたものかもしれない。24は長さ4.7cm、重量も29gしかない。くさびのような形をしており、全面よく研磨されている。

④ 石 盆 (第26図1~7)

石盆は21点出土しているが、小破片が多い。住居址出土の石盆でも確認されたが、周囲を削り取ったような痕跡の残るものが多い。廃棄する際の儀礼にともなうものか、素材として再利用したものなのか検討課題である。石質はすべて安山岩であるが、黒色で多孔質のものが多い。

1・2は全体的に小型で、皿部も浅い。3・6はやはり皿部は浅いが、大型の石皿である。とくに6は、この部分だけで2.5kg以上あり、かなり重量のある石皿であったものと思われる。

4・5は、黒色をしめす多孔質の安山岩製である。加工しやすいので底部も平らに整形している。大きめの石皿のようだが、全体の形を知ることはできない。縁が高く、皿部が深くなるのが特徴的である。5の縁の部分は意図的に傷つけられている。

7は、石皿というよりも石鉢とでも分類したほうがよいもので、本遺跡からは1点出土しているだけである。全面を加工整形して形をつくりだしている。外形はおよそ角が丸くなった四角。幅8.5×7.5cm、高さ5.3cm、深さ3cmある。黒色をしめす多孔質の安山岩で重量318g。据え置いてする作業するには適しているように思えない。

⑤ 磨石・凹石（第26図8～15）

磨石・凹石は18点出土している。8・9は大きめの安山岩の河原石を用いている。ともに表面に磨面が、周縁には敲打によるものと思われる剝離もみられる。重量は8が580gある。9が475gある。10～15には凹みが1～4面にみえる。10は横円形の川原石を利用している。多孔質安山岩製で周辺に多くの凹みをもつ。重量は380g。11は安山岩製で表面に大きめの凹みを一つもつ。重量は150g。12も安山岩製。三面に凹みをもつ。重量368g。13も安山岩製。表裏や側面に凹みをもつ。重量は180g。14は多孔質の安山岩製で周縁を削って、石けん形に整形している。片面にくぼみがある(110g)。15は軽石製で同じく周縁を削って、石けん形に整えている。図示した(くぼみをもつ)面の裏側も平らに整形している。重量は46gである。本村周辺では類例のないものである[2]。

⑥ 敲石（第25図12～21）

46点の敲石が出土している。小さめの石をそのまま用いるものと川原石を半割りにしたものとがある。さらに形態からは、扁平な丸い石を用いるもの(17～19)、横長の石を用いるもの(13・15・16)、塊状の石を用いるもの(20・21)という区別もできそうである。しかしこれが使用にどう反映しているのかはつかめない。

12・14は河原石の素材を半割りにしたものを素材としている。周縁の剝離が顕著である。横刃石器あるいは扇状石器といった分類にしたほうがいいのかもしれない[3]。材質は安山岩が多く、頁岩(12・18)、砂岩(15)、石英がある。20・21は石英製で端部につぶれ痕がよく残る。

図示した敲石の重量をみると16・18が100gほど、13・20が90g、12・16・17が70g、21が60g、14が50g、19が30gほどになる。おそらくは対象とする器種の大きさや加工部位(力加減)によって敲石の形態や重量のことなるものを使用したのだろう。

⑦ その他（第24図）

石匙は1点出土している。25は黒曜石製で長さ11.4cmある。このような縦長の形は当地では見ることの少ない形である。使用痕と思われるつぶれが、両側の剝離面上などによく残っている。重量は26gある。スクレバーは1点出土しているだけである。26は玉髓製である。重量は27gあ

る。楔形石器（21～23）は17点出土している。すべて黒曜石製である。剥離痕のある剝片（24）は3点出土している。

なお、このほかの遺構外出土の剝片を、石質ごとにその数と重量を示しておく^[4]。黒曜石200点・520g、流紋岩類8点・660g、チャート6点・40g、緑色凝灰岩5点・260g、玉髓4点・52g、石英粗面岩3点・294g、鉄石英3点・294g、無斑晶質安山岩3点・107gとなっている。

(小桙)

註

- 1 石質については野尻湖ナウマンゾウ博物館の中村由克氏にご教示いただいた。中村氏によると、ここで分類した頁岩・凝灰岩は大きな差はないもので、もとの産地は同一ではないかとのことである。
- 2 県内の軽石製品については鶴飼幸雄氏の研究がある。
鶴飼幸雄 1994「八ヶ岳山麓における縄文中期の軽石製品」『中部高地の考古学IV』
- 3 犬遺跡では、類似の石器を横刃石器や扇状石器としている。
森山公一 1991「石器」「犬遺跡」小川村教育委員会
- 4 砂岩や安山岩の転石は、これらの破片よりはるかに多く出土しているが、素材として持ち込まれたものか判断しがたく対象に含めていない。

第4章 調査のまとめ

限られた調査範囲であったが、遺跡の中央部をほぼ横断するトレンチを掘った形になった。遺構の分布をみると13軒の住居址は東西に分かれ、その内側に土坑が分布し、さらに内側は遺構も遺物もみられない区域となる。永野龍雄氏によると、これまでの遺跡での遺物の出土状況も、この台地の周縁部から傾斜部にかけて多くみられるとのことである。

住居が台地の周縁部にそって弧状に分布し、その内側に土坑群が分布し、中央部に広場を持つかなり規模の大きな集落の存在が予想される。

出土した遺物からも新しい所見を得ることができた。

基本的には寺内氏の紹介した内容（第2章第2節参照）に沿うものであるが、出土土器の内容にいくぶん違いもみられた。私にはこれらの土器を十分分析する力がないが、いくらか知り得たものをまとめておきたい。

・中期前葉から中葉にかけての地元の土器が多いようである。この時期の千曲川水系の土器については「仮称深沢式土器」の細分が課題になってこよう。また、千曲川水系の土器についても中南信の土器編年を用いてきたが、顔つきの違いがみられる。独自の編年型式をとらえる必要があるように思われる。その際は、上赤塙遺跡から出土している土器の分析は欠かせないものになることだろう。

・地元の土器に、北陸・関東・県南（分水嶺以南）の土器も若干含まれており、分類の素材になると思われる。

・中期中葉の地域差について考える資料も得られた（口縁文様帯のモチーフや器形に特色がみられることや口縁部突起に北陸地方の土器の応用がみられるなど）。

・土偶からも、北陸地方の影響を受けつつ地域色をもつことが感じられる。

なにより、住居址から出土した土器をまとめた形でとらえることができたのが大きな成果であった。

(小柳)

主要参考文献

中期の土器については非常に多くの論考がある。自分が目を通した文献はわずかであるが、それでも結構な数になった。主なものをあげておきたい。

今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年」『東京大学考古学研究室紀要第4号』

植田 真 1988 「落沢式土器様式」『繩文土器大観2 中期I』

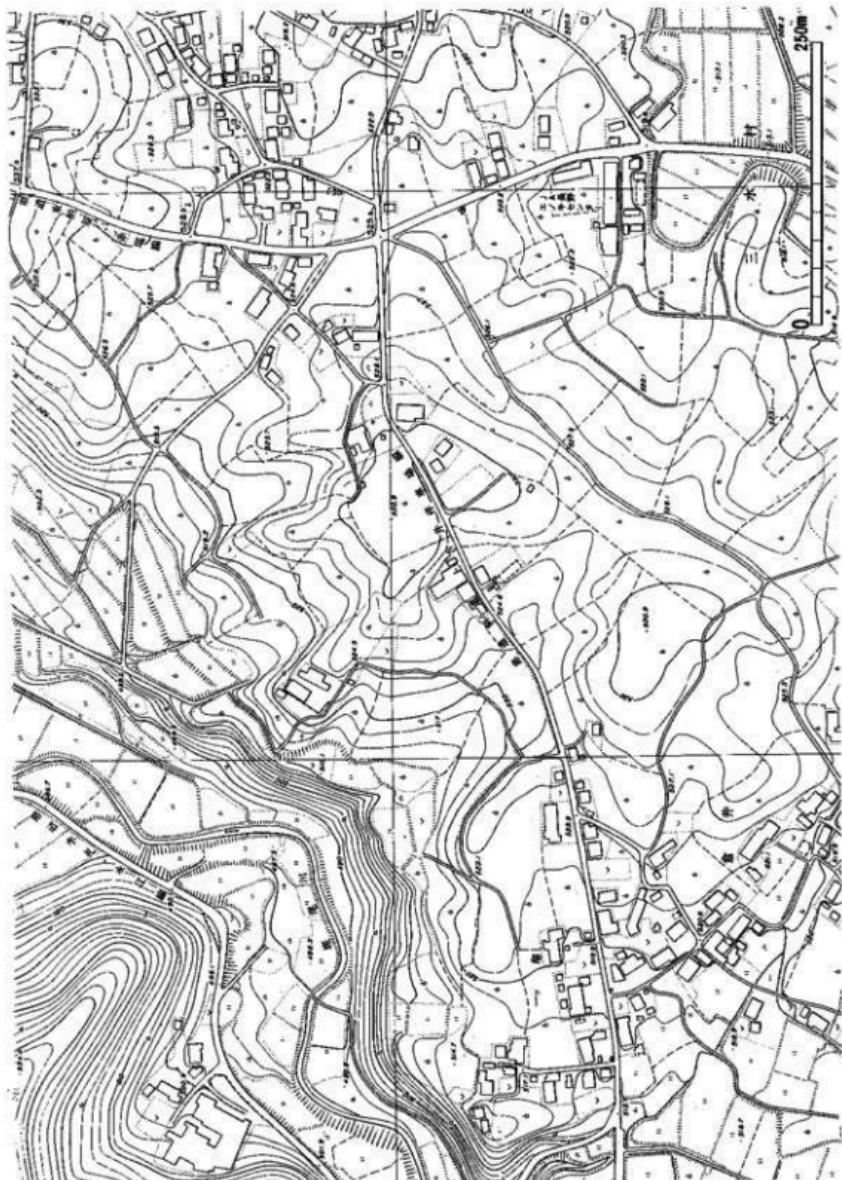
加藤三千雄 1988 「新保・新崎式土器様式」『繩文土器大観3 中期II』

黒岩 隆 1993 「深沢遺跡」『飯山市誌歴史編上』飯山市誌編纂委員会

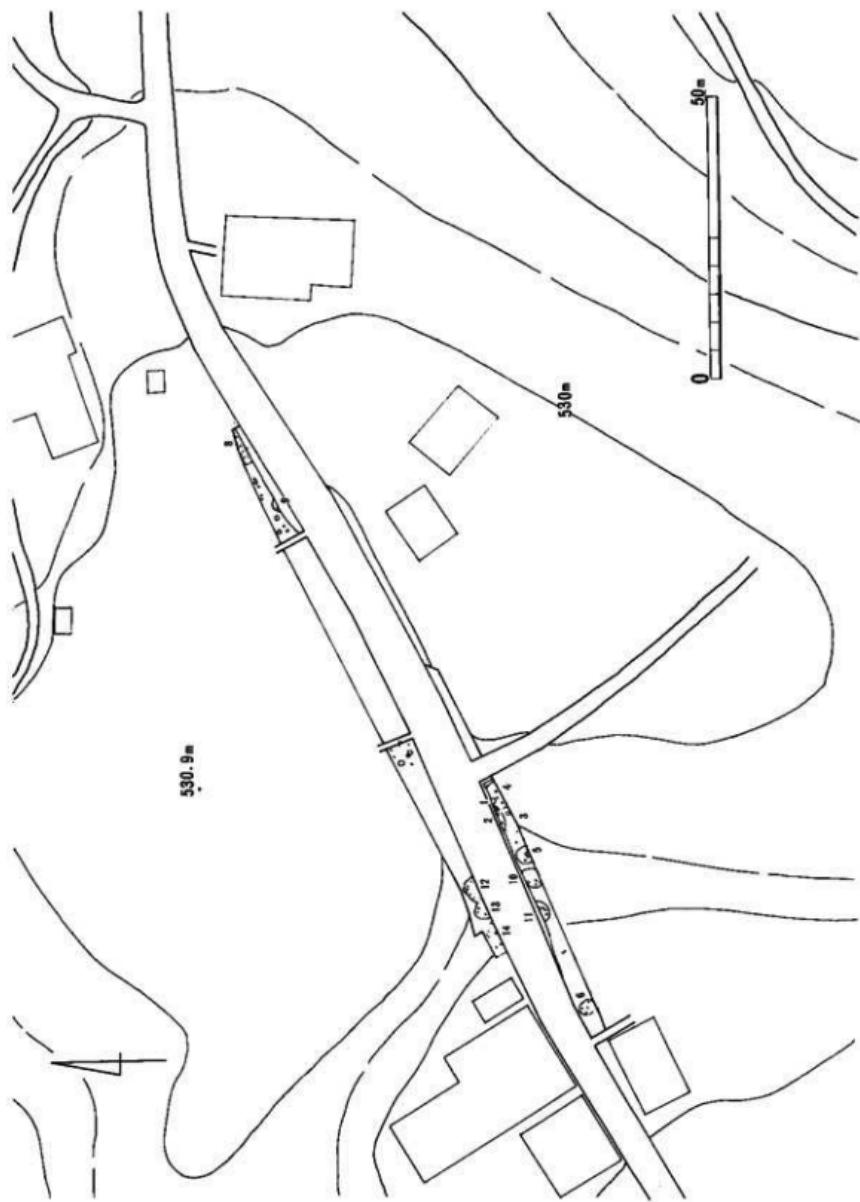
高橋 保 1989 「県内における繩文中期前半の関東・信州系土器」『新潟考古学談話会会報4』

寺内隆夫 1987 「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ」『長野県埋蔵文化財センター紀要1』

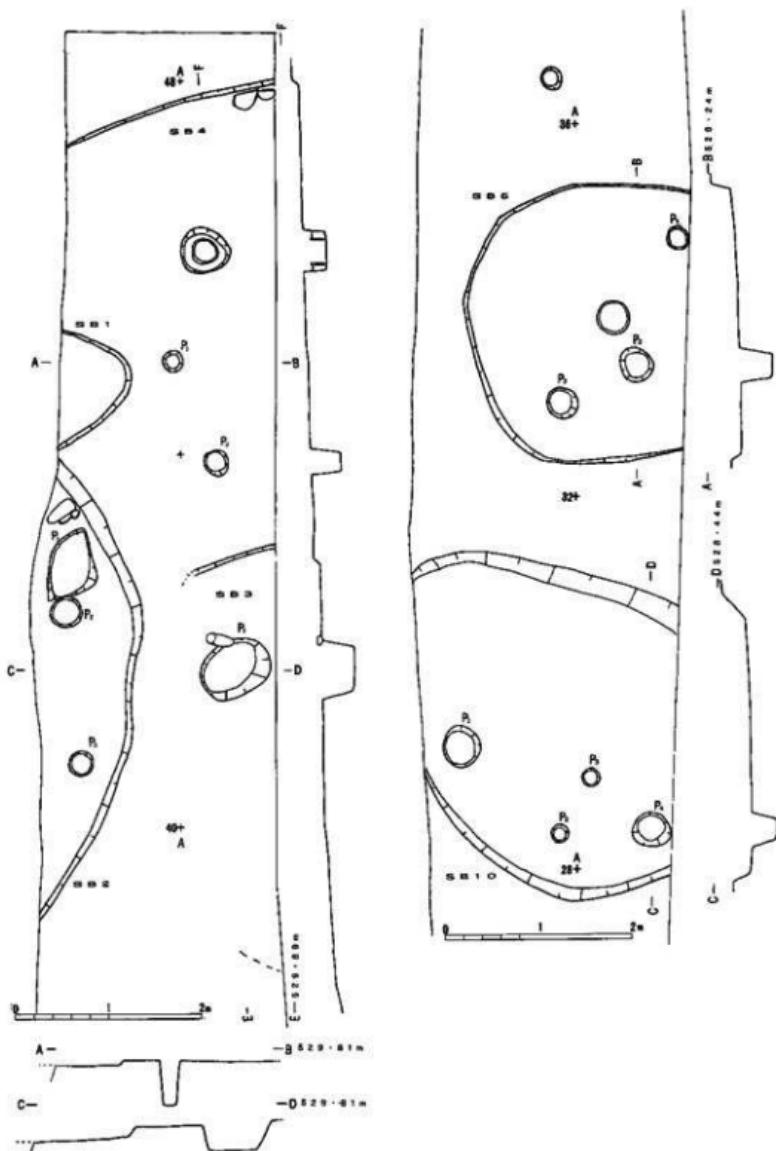
- 寺内隆夫 1995「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
研究論集 I
- 「土偶とその情報」研究会 1996「長野県」「中部高地をとりまく中期の土偶」信毎書籍出版センター
中野市教育委員会 1983「姥ヶ沢」
- 新潟県教育委員会 1992「五丁歩道跡・十二木遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集
- 新潟県教育委員会ほか 1996「清水上遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集
- 三上敬也・上田典男 1995「長野県の様相」『縄文セミナー中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
- 三上敬也 1987「梨久保式土器 再考」『長野県埋蔵文化財センター紀要1』信毎書籍出版センター
- 宮下健司 1992「長野県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告第37集 土偶とその情報』国立歴史民
俗博物館
- 山本典幸 1988「五領ケ台式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』



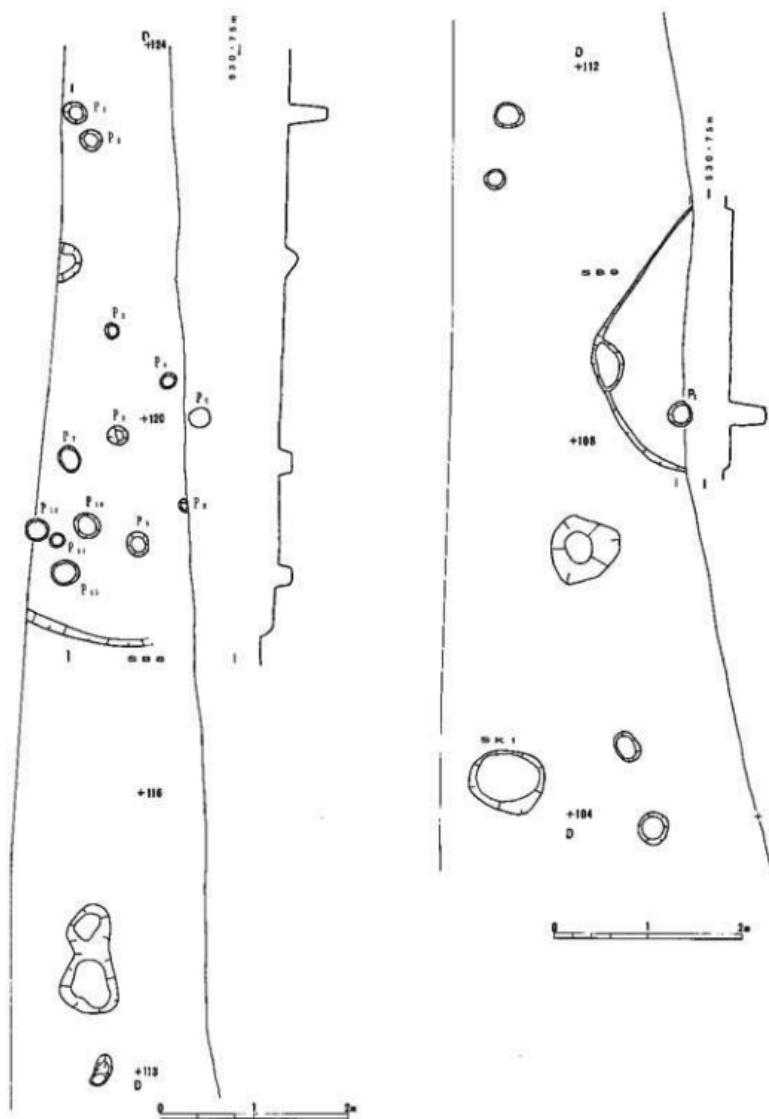
第1図 上赤塙遺跡周辺図



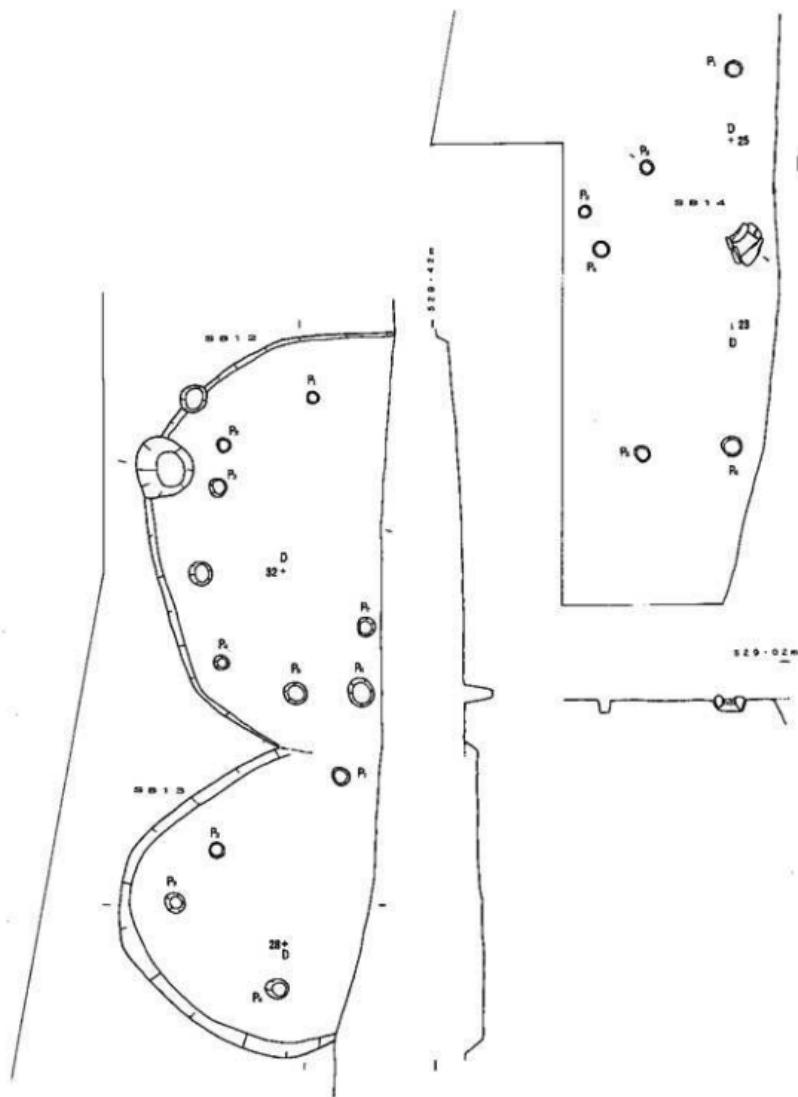
第2図 上赤塩遺跡遺構全体図



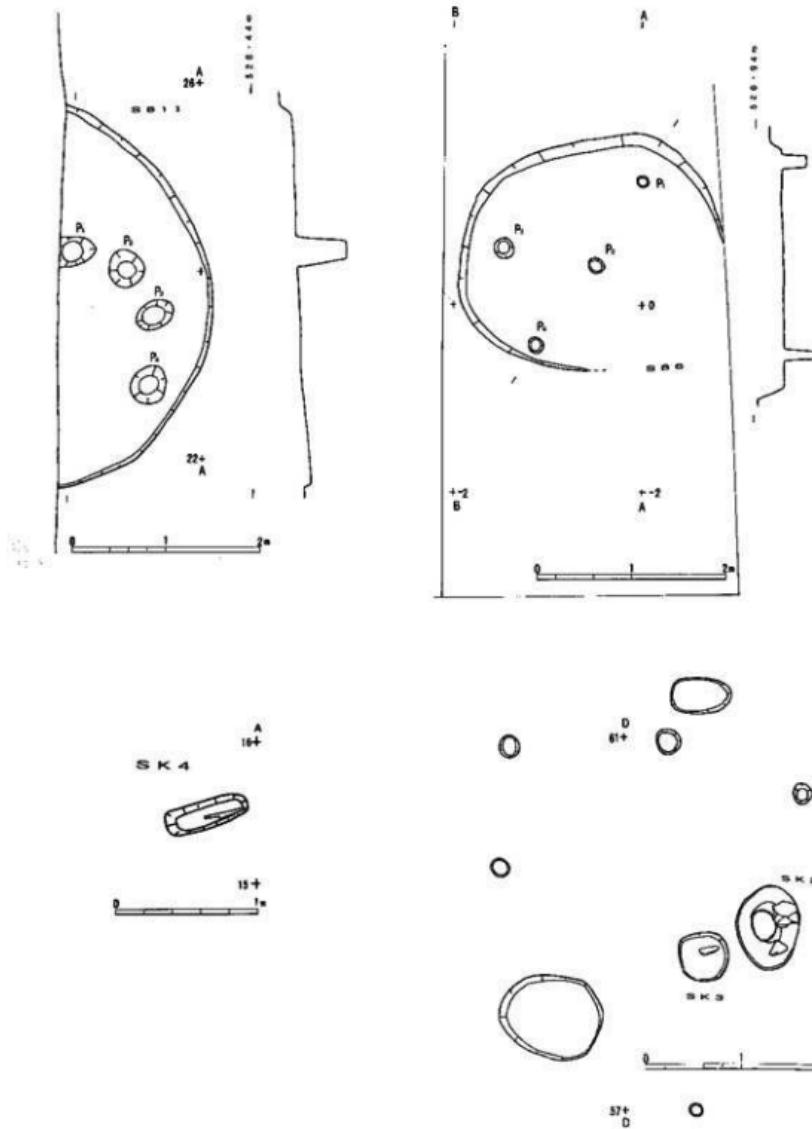
第3図 上赤塚道路遺構実測図(1)



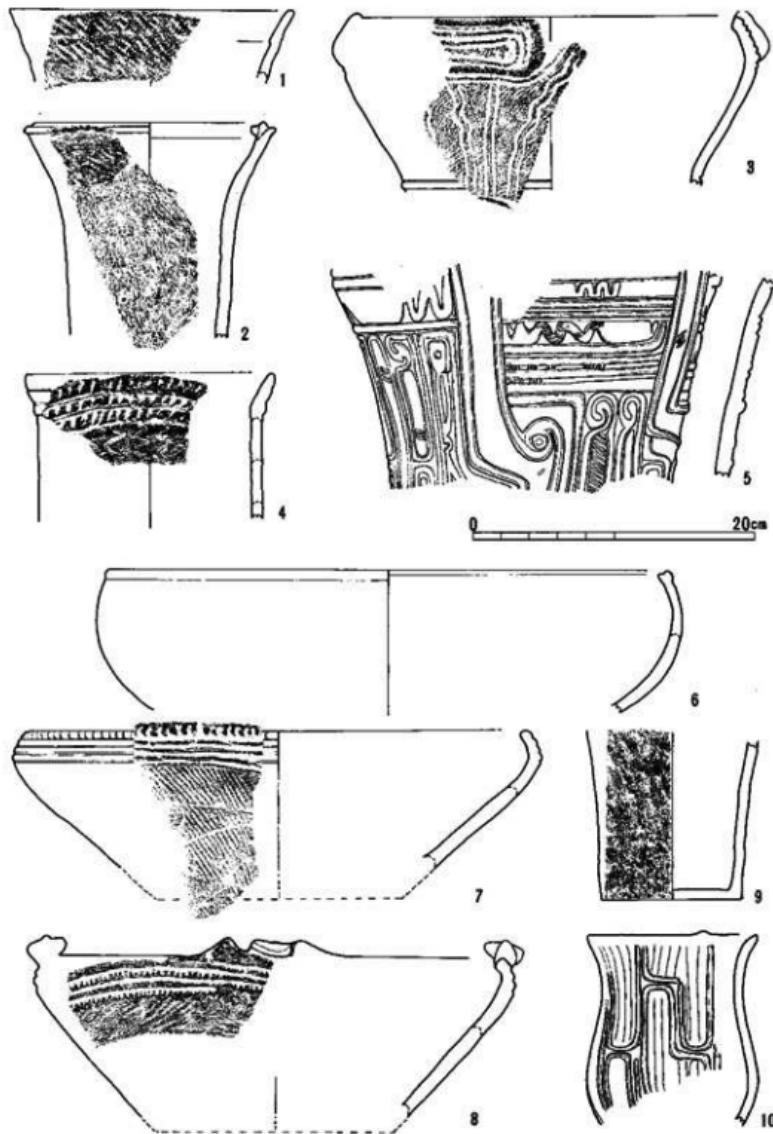
第4図 上赤塙遺跡遺構実測図(2)



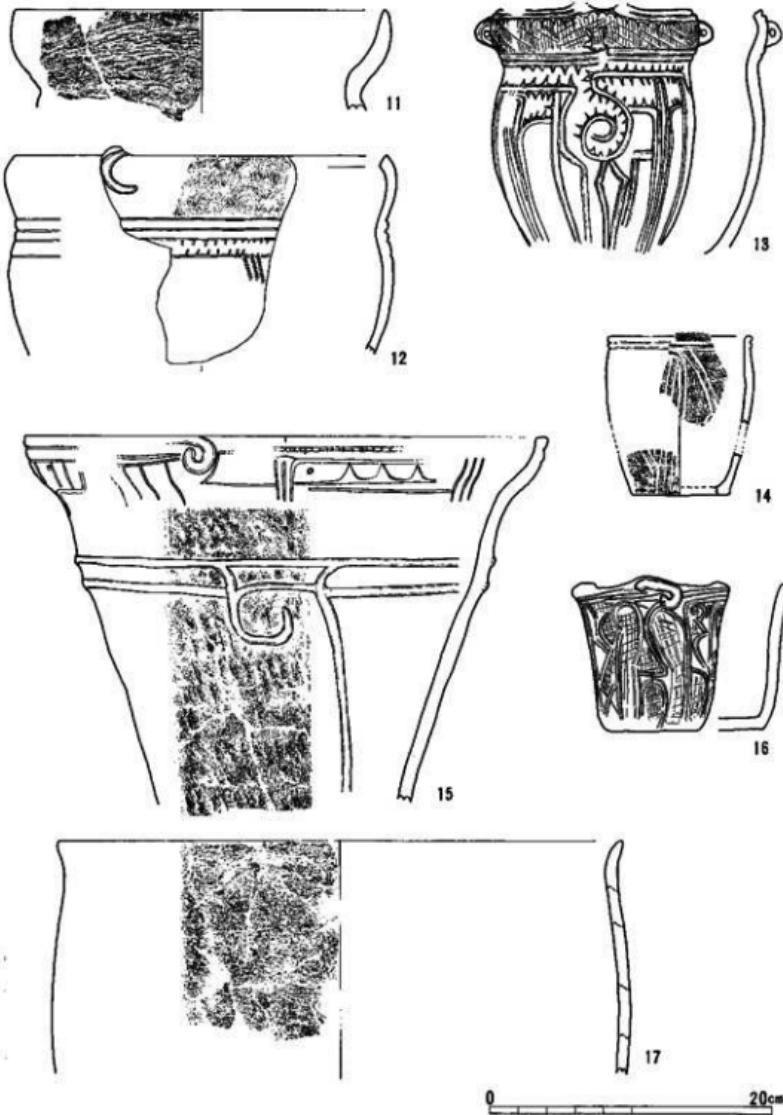
第5図 上赤塙道跡遺構実測図(3)



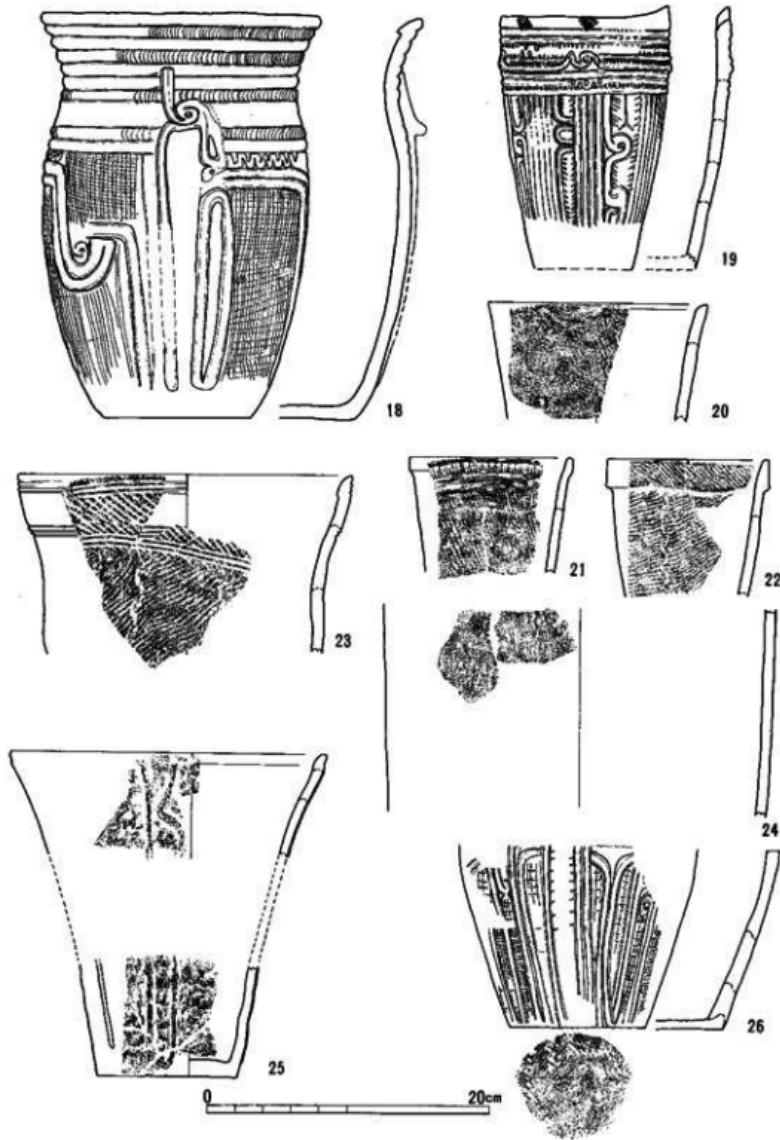
第6圖 上赤塙遺跡遺構実測図(4)



第7図 上赤塗遺跡出土土器実測図



第8図 上赤塗遺跡出土土器実測図



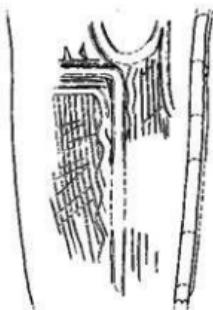
第9図 上赤塩遺跡出土土器実測図



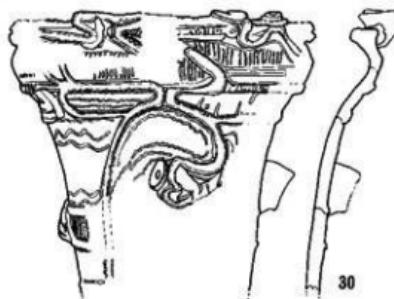
27



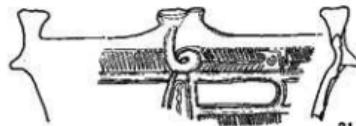
28



29



30



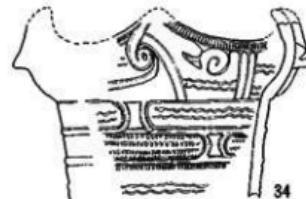
31



32



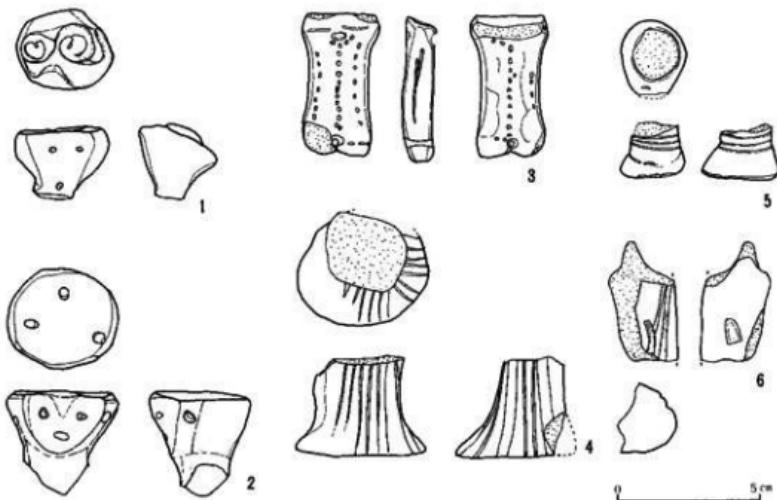
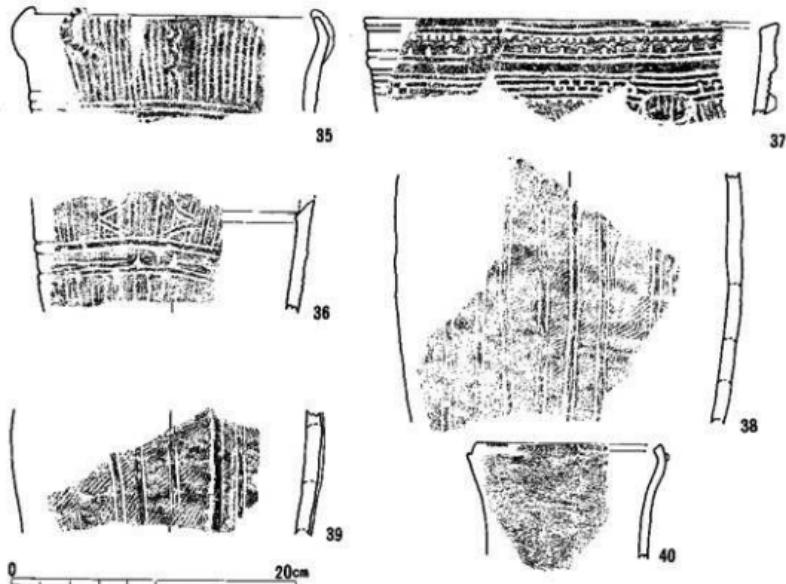
33



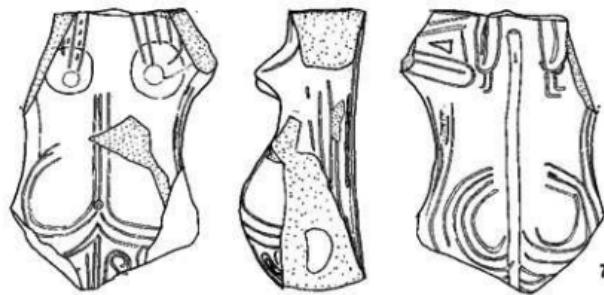
34



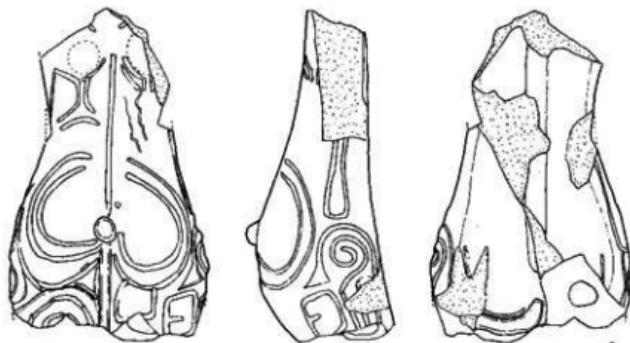
第10図 上水塙遺跡出土土器実測図



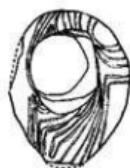
第11図 上赤塙遺跡出土上器・土偶実測図



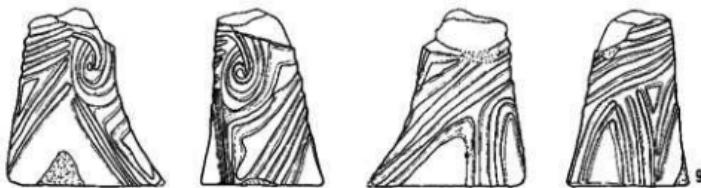
7



8

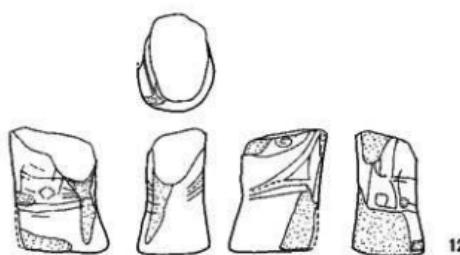
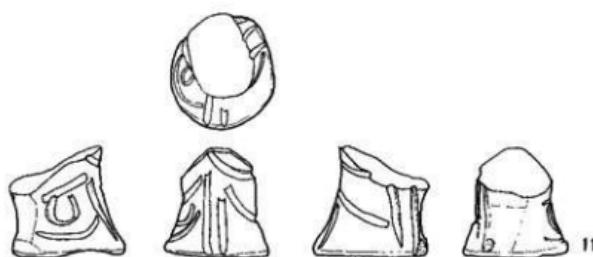


0 5 cm



9

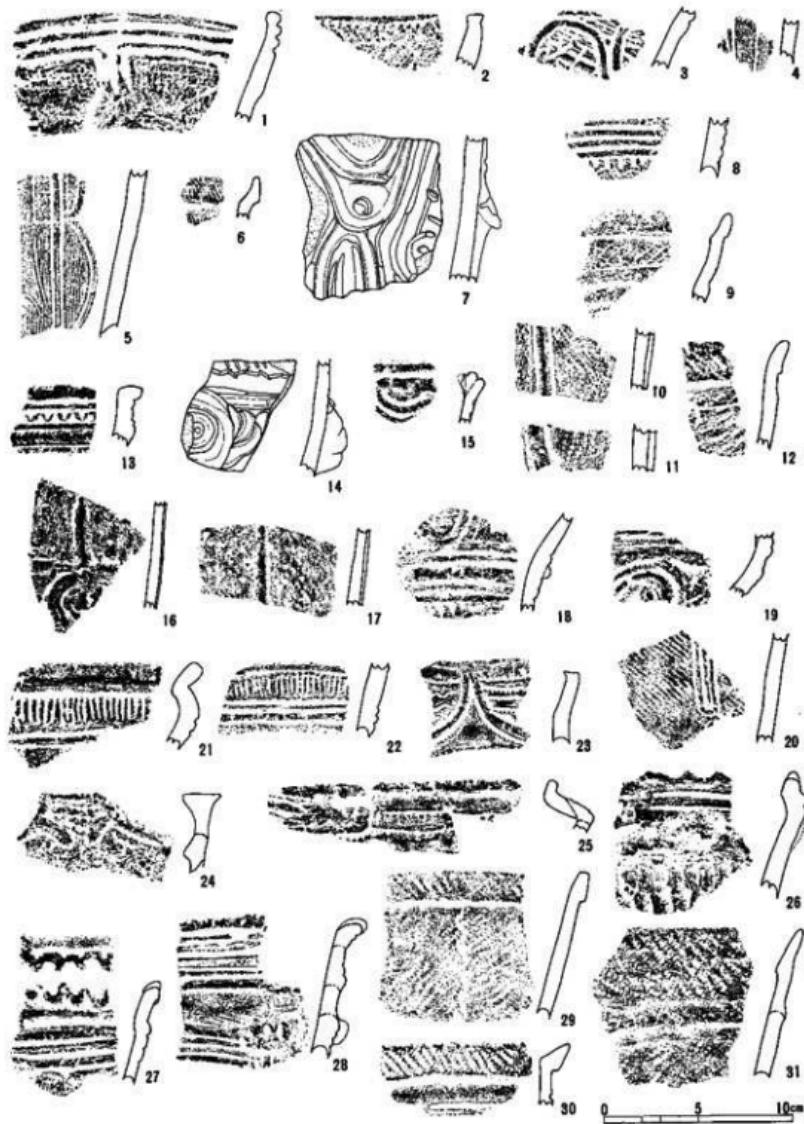
第12圖 上亦塲遺跡出土上偶尖銅圖



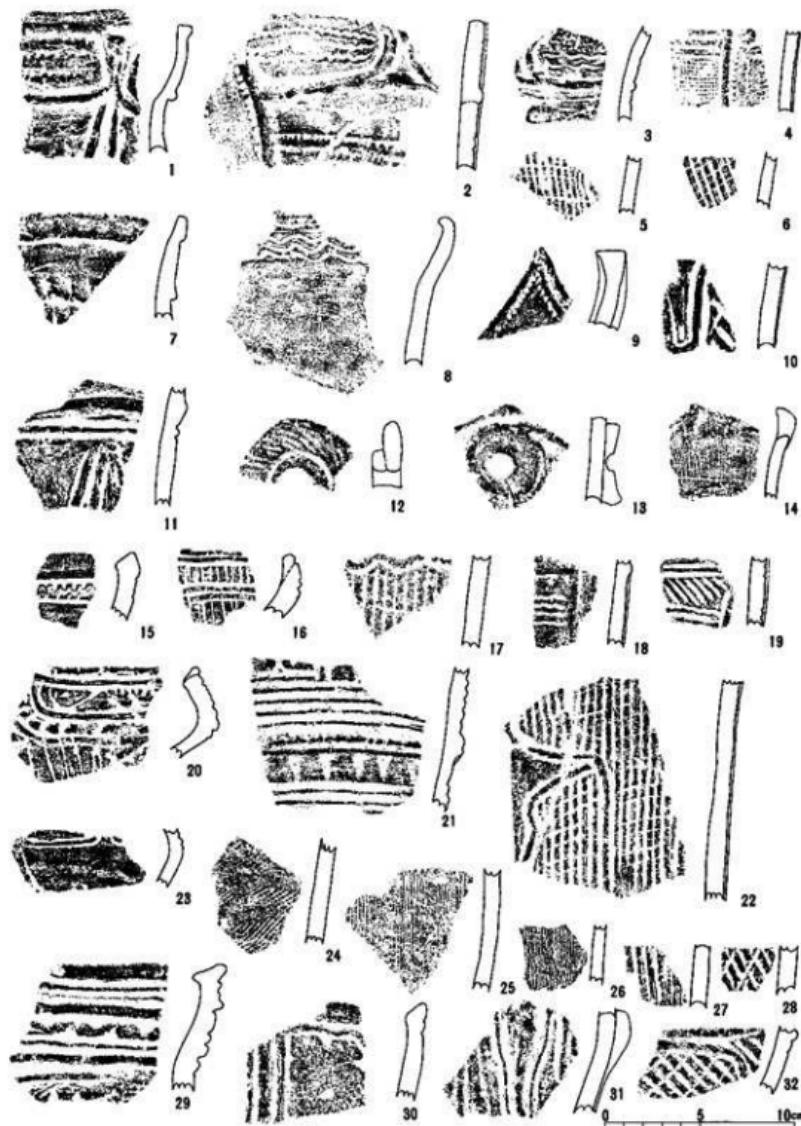
0 5 cm



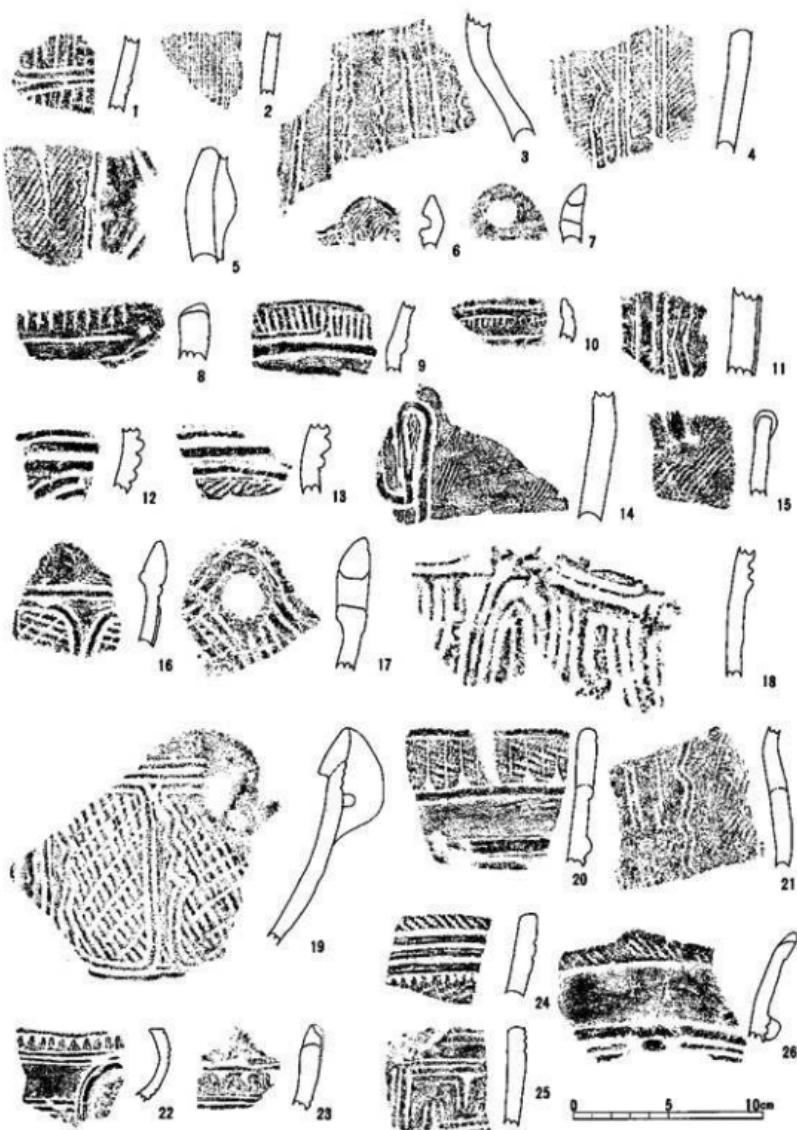
第13图 上赤塙遗址出土七件夹陶图



第14图 上水堆遗址出土土器拓本



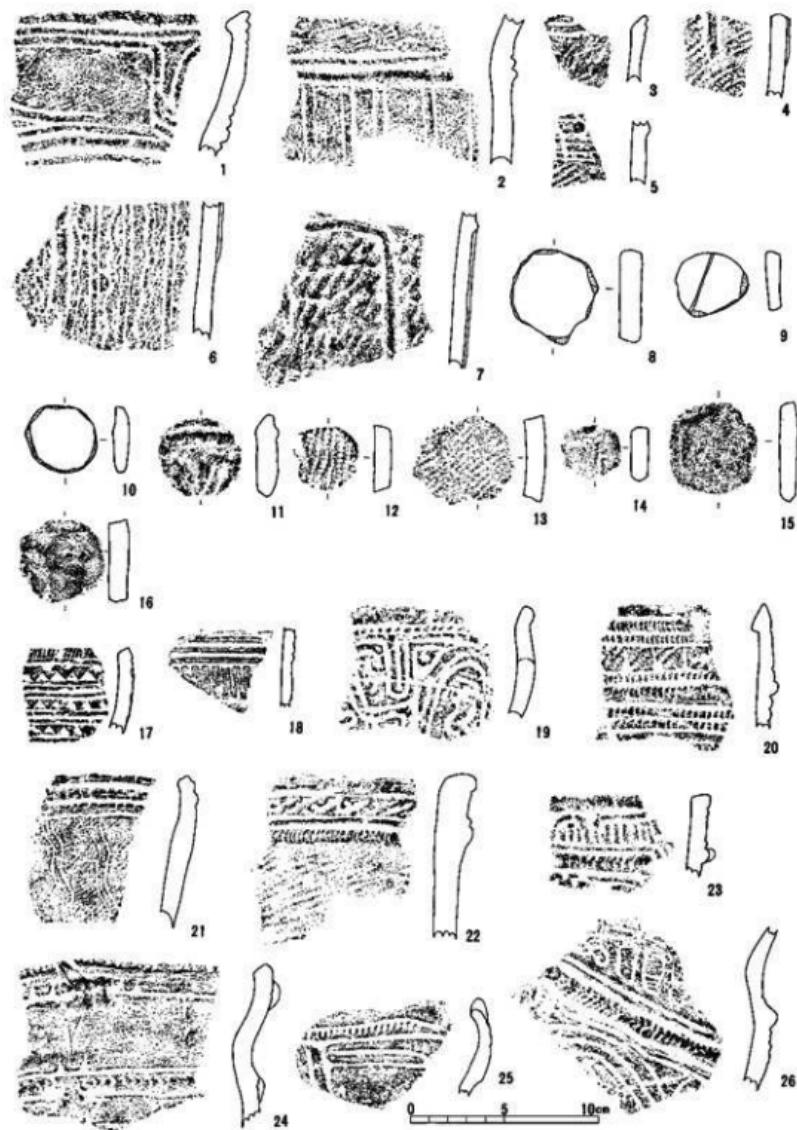
第15図 上赤塩遺跡出土土器拓本



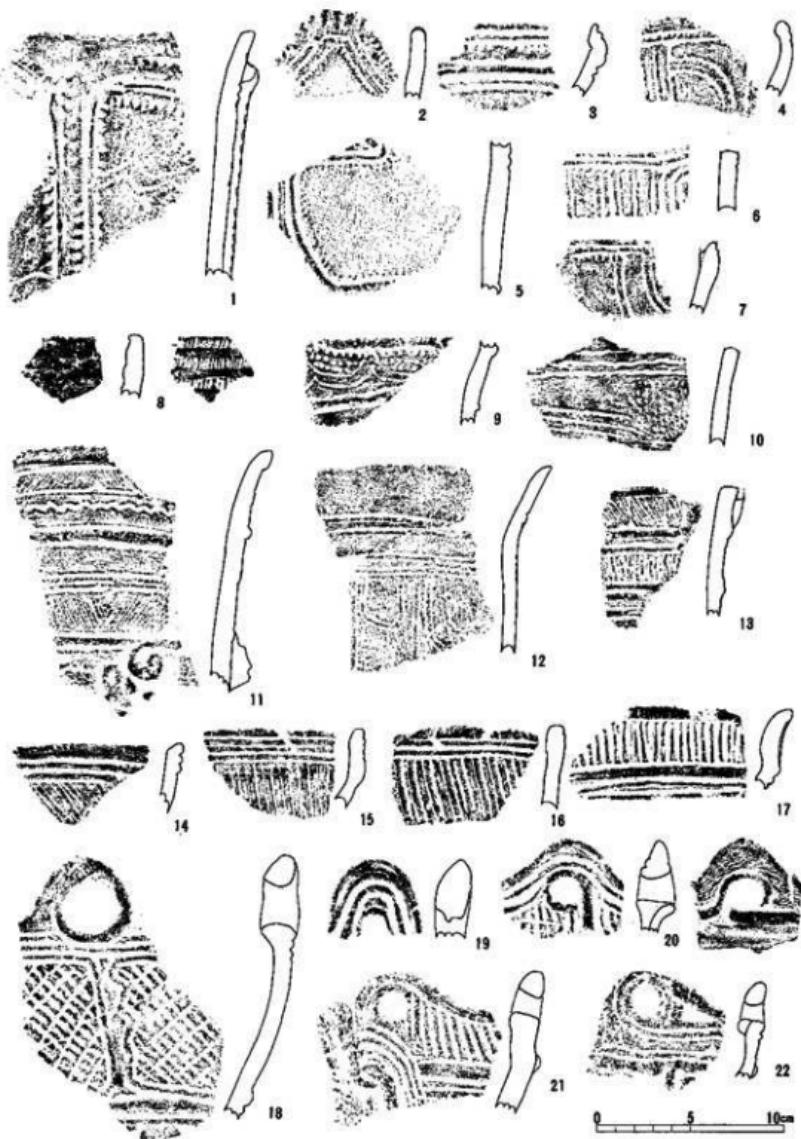
第16图 上赤塚遗址出土土器拓本



第17圖 上赤塲遺跡出土土器拓本



第18図 上赤塚遺跡出土土器拓本



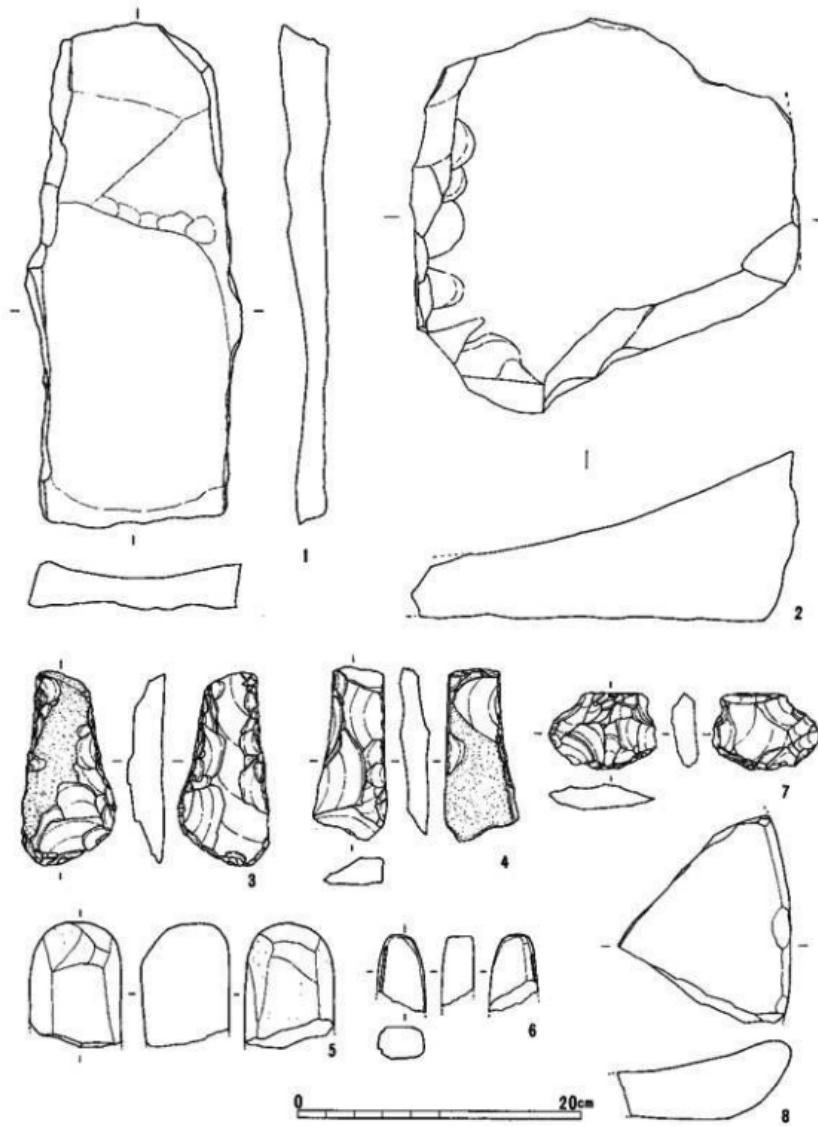
第19图 上赤塙遺跡出土土器拓本



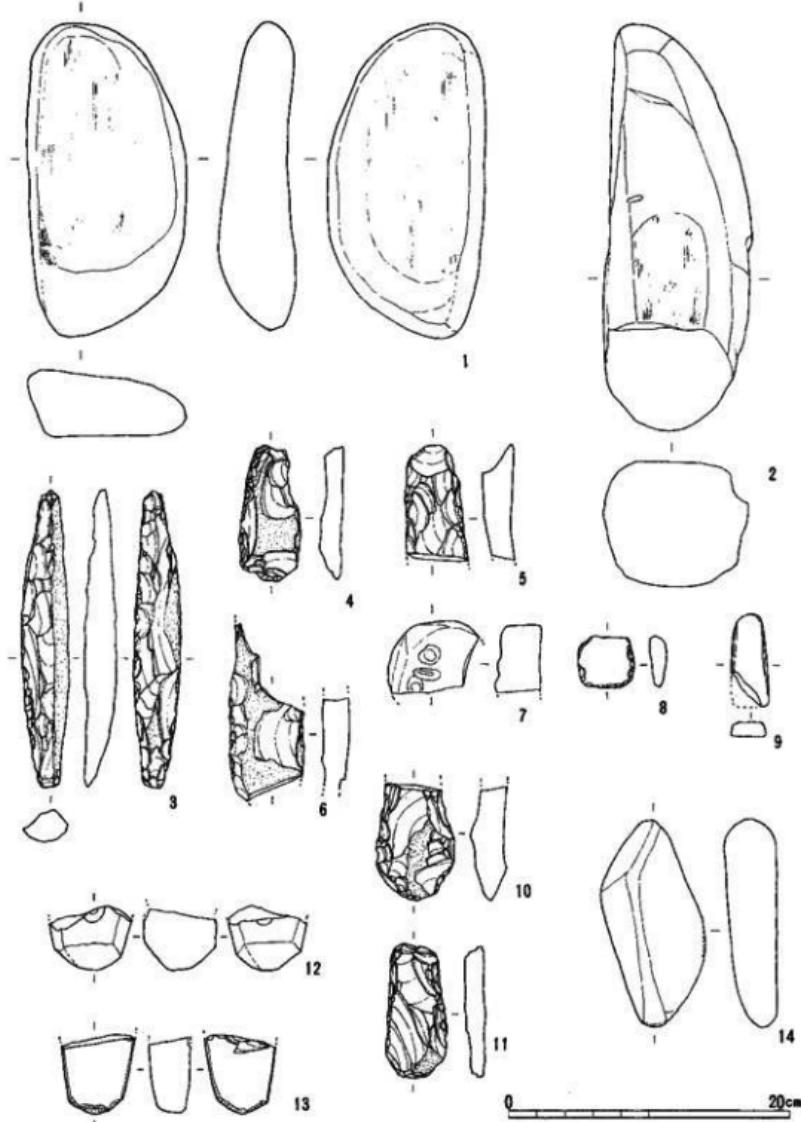
第20图 上赤塙遗址出土土器拓本



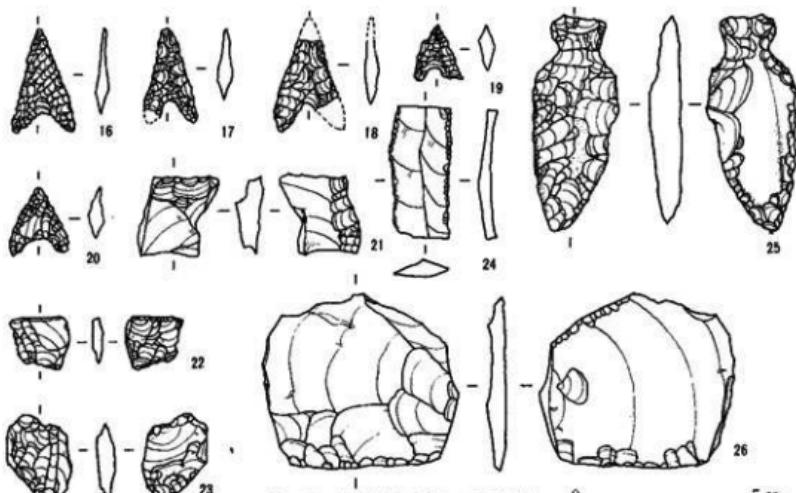
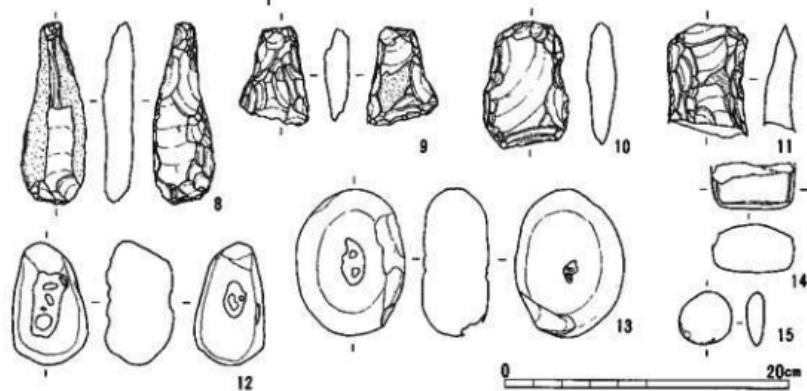
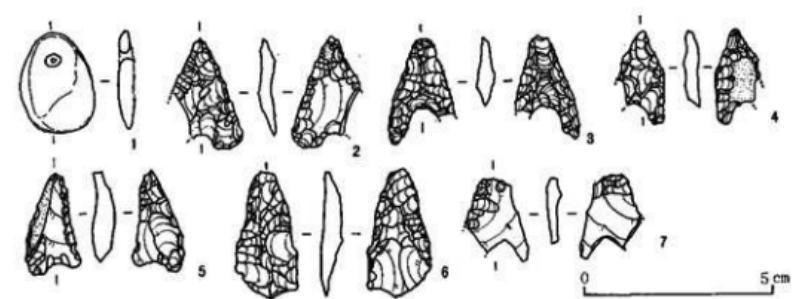
第21圖 上赤塚遺跡出土土器拓本



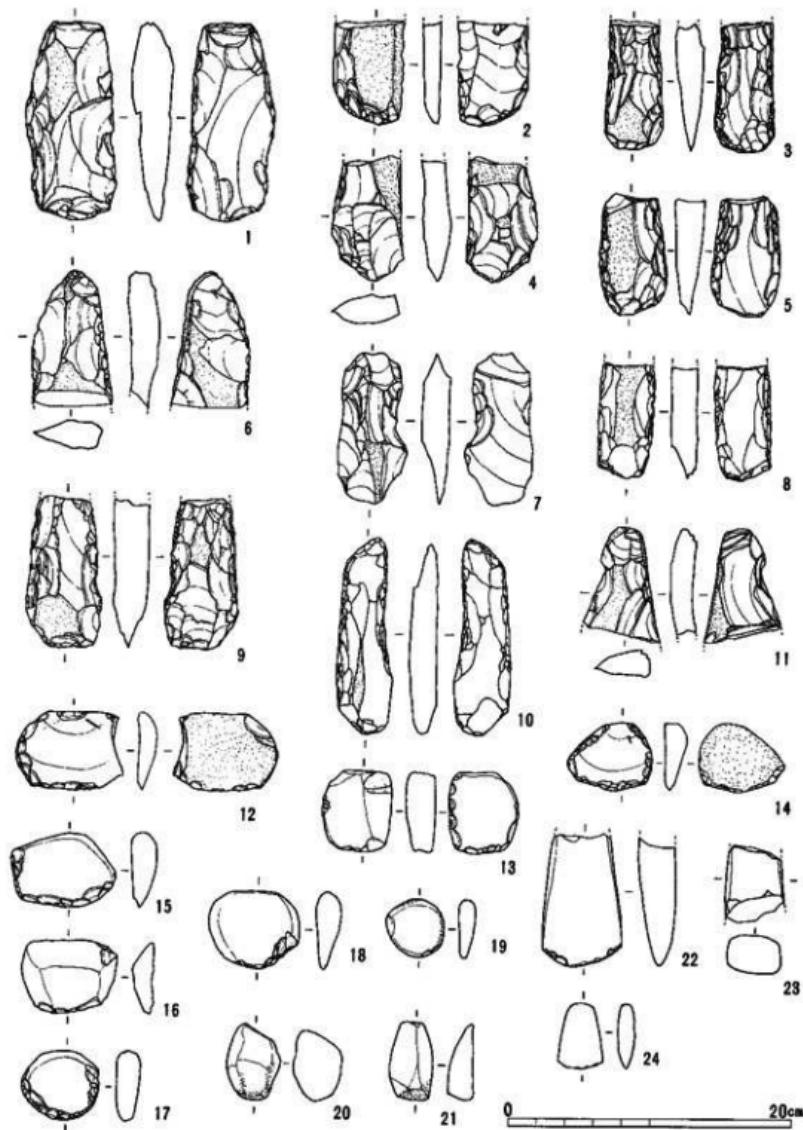
第22图 上赤塩遺跡出土石器実測図



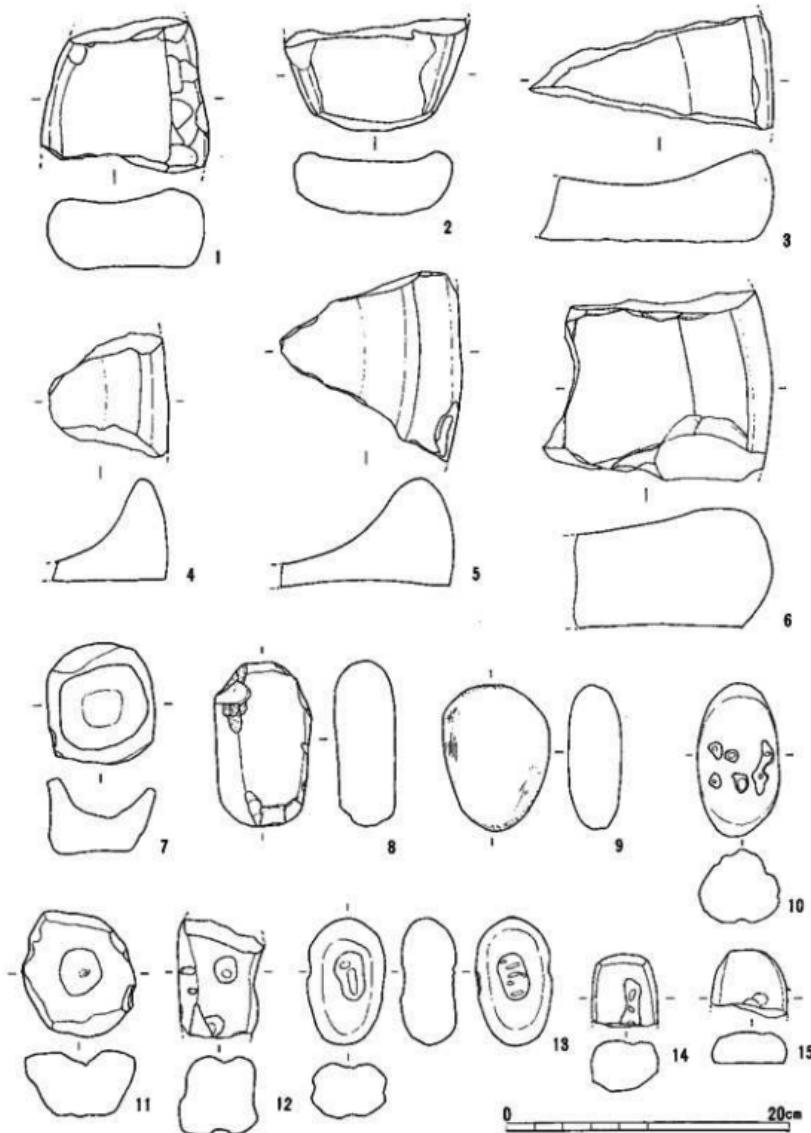
第23圖 上赤塩遺跡出土石器實測圖



第24図 上赤塹遺跡出土石器実測図



第25图 上赤陶遗踪出土石器实测图



第26図 上赤塩遺跡出土石器実測図

写 真 図 版

図版 I

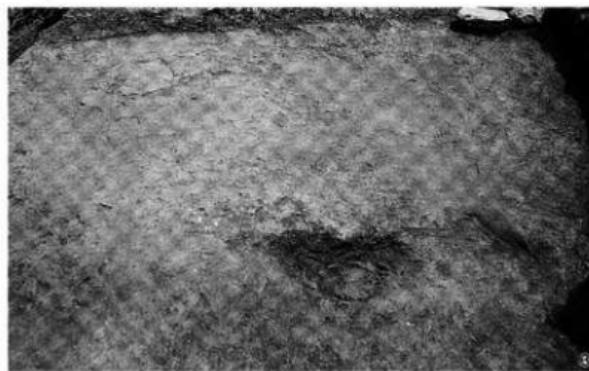


遺跡中央部



S B 4

S B 1



S B 4

埋甕場

図版 2

S B 4

S B 2

S B 3



4

S B 5



5

S B 10

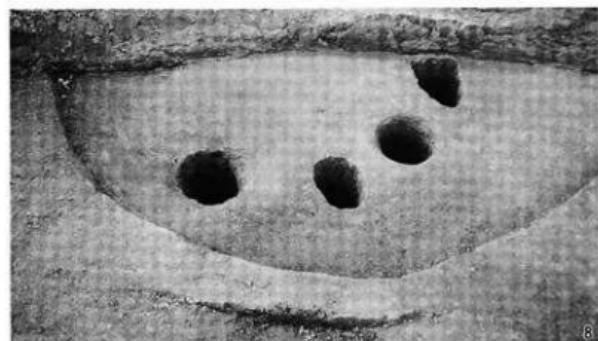


6

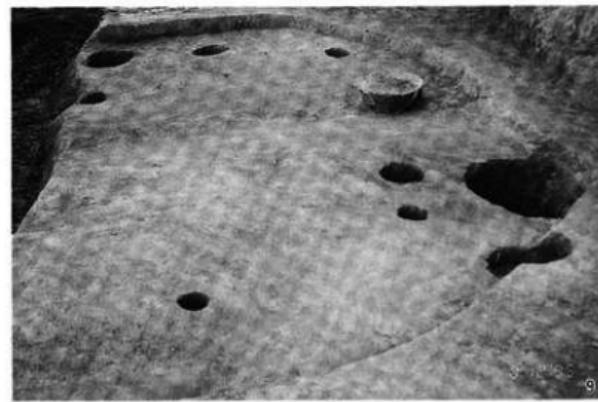
図版 3



SB 6



SB 11



SB 12

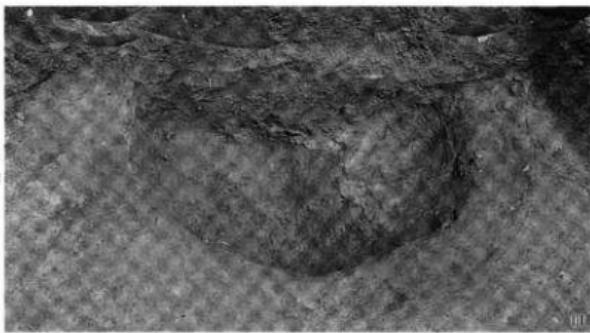
図版 4

S B 8



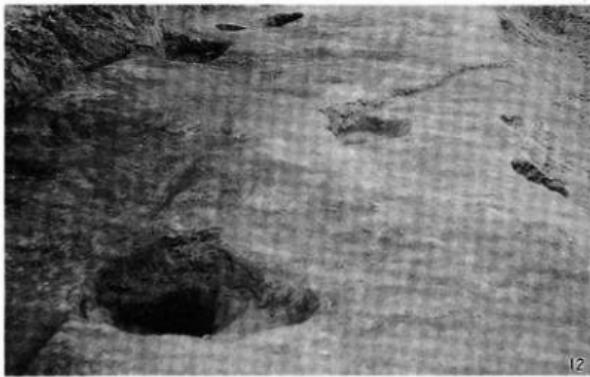
10

S B 8
地床炉

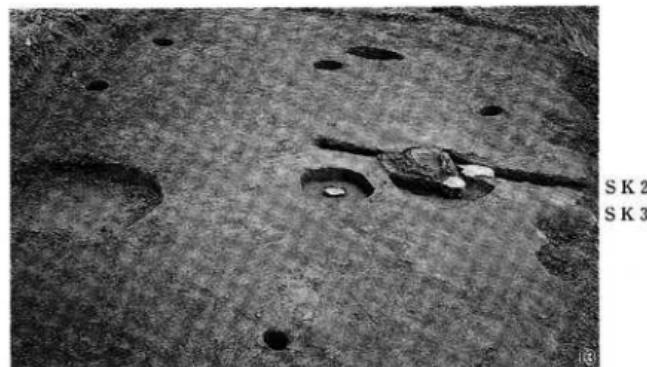


11

S B 9



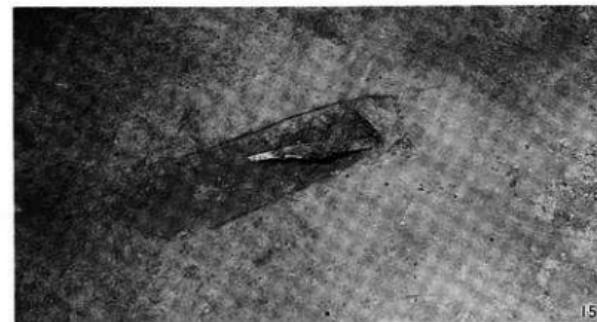
12



SK 2
SK 3



SK 3
SK 2



SK 4
遗物出土状况

図版 6



S B13出土遺物



S B13出土遺物

S B 5 出土遺物



(20・21はSBII出土遺物)
22・23はSBII出土遺物)



上赤塙遺跡出土遺物

図版 8



26



27



28



29

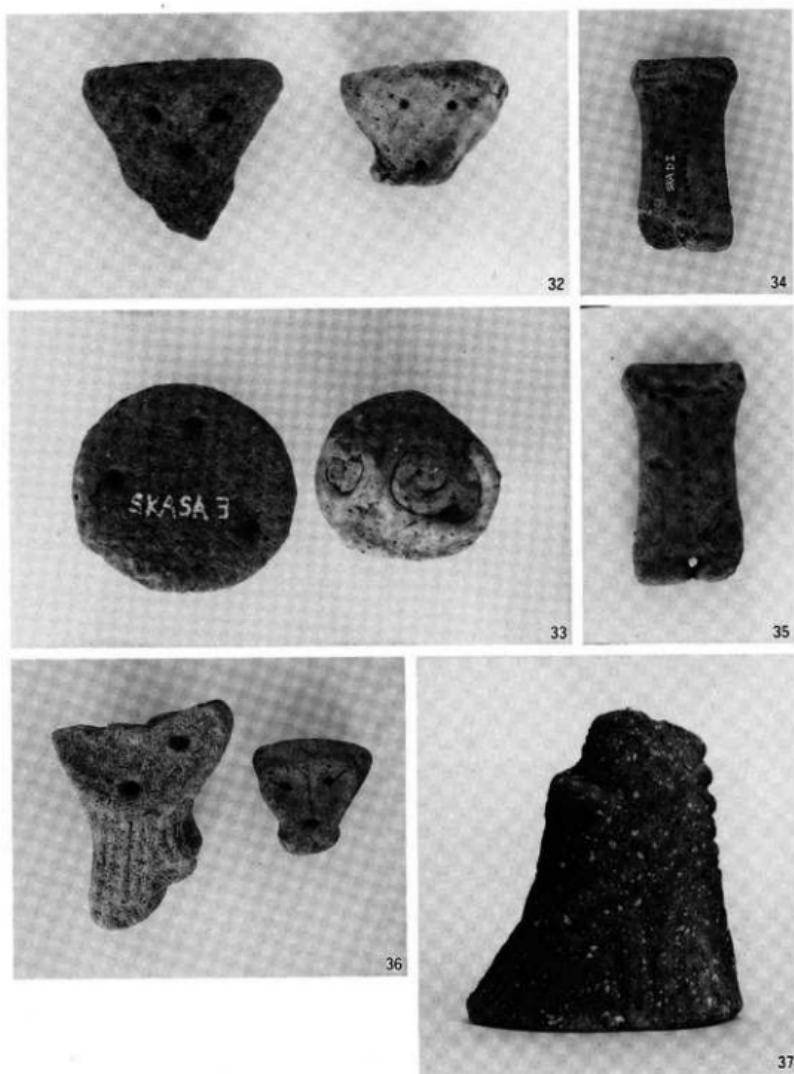


30



31

上赤塙道路遺構外出土遺物



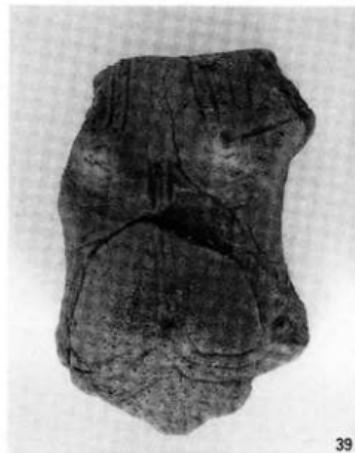
〔ほぞ穴〕に入れやすいように先をととのえている)

上赤塩遺跡出土土偶 I

図版10



38 (脚部に残された頭部の「ほぞ」が見える)



39



40



41 (脚部の付け根に残る「ほぞ穴」)

上赤塙遺跡出土土偶II



42



43



44 (脚部の付け根に残る)
〔ほぞ穴〕



45

46



47

上赤塙遺跡出土土偶II

図版12



S B 5 出土石鏃と黒曜石剝片



打製石斧



剝片類



S K 4 出土刀子

おわりに

平成7年の夏も暑かった。夏休み中に調査を終了させたかったので、土日も発掘した。予想外に住居址が多く出土し、結局夏休みあけの土日も調査した。調査に参加された皆さんに感謝したい。

限られた時間の中で調査し、報告書をまとめるのはやはり大変である。整理が進まず関係者に迷惑をおかけしてしまった。

縄文中期の遺跡は三水村周辺の町村では意外と少ない。とくに前葉から中葉の遺跡はわずかである。そんな中で上赤塩遺跡はよく知られていた。そうした遺跡を調査したにもかかわらず、中期の土器についての知識理解が不足していて、分析も十分できなかったのは残念である。あとはこれを材料に調理してくれる研究者を待ちたい。

三水村教育委員会の皆様には調査中から報告書の刊行にいたるまで大変お世話になった。記して感謝したい。
(小柳)

上赤塩遺跡発掘調査報告書

—縄文中期の集落址—

発行日 平成9年3月31日

発行 三水村教育委員会
長野県上水内郡三水村茅川324

印刷 ほおづき書籍株式会社
〒381-0012 長野市柳原2133-5

